

【特別掲載】

世親作『釈軌論』第5章翻訳研究（5）

堀内 俊郎 上野 牧生*

はじめに

本稿は、拙稿(1)～(4)に続く世親(Vasubandhu)作『釈軌論』(*Vyākhyāyukti*)第5章の翻訳研究の一環であり、本稿で扱う箇所でもって第5章は終了する。

周知のごとく、『釈軌論』は全体として、目的(prayojana)に始まる5相から成る経典解釈法を提示する¹。しかし、本第5章で、世親は、それよりも前になすべきことがあるという。すなわち、経典を引用し、詰問し(この経典はどんなことを説いているのかと尋ねるといふほどの意味であろうか)、そのことによつて聴衆に対して回答への渴望を生じさせるべきだという。ただ、回答への渴望が少ない者もいるため、敬意をもつて聴くことに関する話を提示すべきだとする。ではこの話は渴望の少ない者に対してのみなされるべきなのかということ、そうではなかろう。その直後には「目的の説明をも、敬意をもつて聴いてもらうためである」という記述があるので²、渴望が生じた者に対してもそのような話を提示することが必要とされているのであろう。とすれば、以上の流れを図示すれば以下の通りとなろうか。

経典引用(提示) > 詰問 > 回答への渴望を生じさせる > 敬意をもつて聴くことに関する話 > 傾聴 > 目的などの5相でもって経典解釈する

本第5章の主題は上記の下線部を説明することにある。具体的には、「(5.1) 発奮させること、(5.2) 目的を明示すること、(5.3) 落ち込み・居眠り、誤解によつて、心が沈み、心が乱れた者たちに対し、〔それぞれ順に、〕珍奇な〔話〕、面白い〔話〕、厭離の話をする」ということである³。本稿で扱う範囲はそのうち

※本研究は JSPS 科研費 17K02224 の助成を受けたものである。

- 1 Kramer 2015 : 290-291.
- 2 上野・堀内 2018a : 118.
- 3 同 119.

の厭離の話(**samvegakathā*)の全体と、第5章末尾、すなわち『釈軌論』末尾までである。

世親はここで、6組の偈頌と、1つの話と、1つの前世譚を提示、解説し、当該の主題を説明する⁴。特に偈頌の部分に関して言えば、引用される偈頌もそれに対する解説も簡潔に過ぎる場合があるので深い含意が必ずしも読み取れないところもあり、引用ではなく世親自身によるまとめの偈頌が提示されていると思われる個所もあるので厄介ではあるものの、趣旨は明瞭である。

たとえば、最初に提示される偈頌は、人生は百年であるが、睡眠によって半分となり、さらに日中の睡眠によっても人生は短くなる云々と説く。世親はそれについて、安穩な境地を得ていない者が輪廻のなかでそのように安心して眠っているというのは不適切だと述べ、安穩を得る道を示す。この偈頌は要するに人生の無常を説いたものであるが、当該箇所脚注に示した通り、類似する内容は、Bhartrhariの*Śatakatraya*の第3、*Vairāgyasataka* (『離欲百頌』) 49偈や、*Mahāsubhāsitasaṃgraha*, *Garuḍapurāṇa* などに見られる。さらに言えば、道綽の『安樂集』にも類似する内容が引用、言及されている⁵。その内容は、人生百年であるがそれは夜(睡眠)によって半分(50年)となる。15歳以前は善悪を知らず、80歳以降は衰えてしまうので、残りは15年である。その15年も様々な労務に費やされる。このように考えれば、仏道を修するいくばくの時間が残されているかと、哀しみ、厭うべきである、ということである。この例からも知られるように、ここで展開される厭離の話というのは感傷論ではなく、透徹した目によって捉えられた現実の観察に基づく。また、その出典は必ずしも仏典に限らず、広く人口に膾炙した偈頌や説話だった可能性もある。いずれにせよ、世親は本箇所、人生の無常、欲望の過失、仏法の聞き難さ、仏法を正しく聞かないがために起きる不幸を説く話などを例示し、仏法を敬意をもって聴くことを勧める話を展

4 この厭離の話について、世親は、「以上の類いの偈と、話と、前世での活動などによって、厭離の話を用意すべきである」と結んでいる。後2者は、順に、八無暇の話(§5.3.3.7)とカポータ・マーリニーの前世譚(§5.3.3.8)をさすことは明らかである。とすれば、「偈」とは、それより前に提示されている6組の偈頌(§5.3.3.1-§5.3.3.6)のことを指すのであろう。本稿310-311頁に示した梗概を参照。

5 T no.1958, vol.47. 20a17-24。そこでは『淨度菩薩經』が出典とされるが、大内1973が、実際は『五王經』という經典に基づくものであることを明らかにした。

開する。

本稿の成果の一つは、まず、『ブッダチャリタ』(*Buddhacarita*)からの引用を比定できたことである。世親と馬鳴(*Aśvaghōṣa*)については、『成業論』(*Karmasiddhi*)の善慧戒(*Sumatīśīla*)が、『成業論』に引用される偈が上座馬鳴のものであることを明示していることが、山口 1951 によって指摘されていた。その際『成業論』自体についていえば、北京版(P)とナルタン版(N)や漢訳には馬鳴への言及がなかったのだが、室寺 1985:39.10 が、デルゲ版(D)、チヨネ版(C)には存在することを指摘していた⁶。しかし、世親の著作における馬鳴の『ブッダチャリタ』からの引用例は、今回初めて指摘されたこととなろう。上野 2015 によって馬鳴の失われた著作が網羅的に再検討され、松田 2020a によって失われた『ブッダチャリタ』の梵文が発見され、インド仏教史上における同書の位置づけもさらに明瞭となってきている。今回の発見によっても、馬鳴の作品は従来の予想よりも大きな影響力を持っていたことが指摘できよう。

もう一つが、本章末尾に言及される『莊嚴經論』について従来より一歩進んで考察を加えることができたということである。厭離の話の提示を終えた後、世親は、「『莊嚴經論』(**Sūtrālamkāra*)においても、經典を解釈する方法(**sūtravyākhyānaya*)が説かれている」とし、同論から2偈を引用し、解釈する。本箇所は短いものの、『釈軌論』が全体として詳述してきた5相から成る經典解釈法に対するオルタナティブを示すものである。その点で、Lee 2001:311 が本箇所を Appendix と位置づけたことは適切であろう。ただ、この『莊嚴經論』については、弥勒/無著作とされる『大乘莊嚴經論』(MSA)には一致する偈頌が存在しないことだけが従来指摘されていたが、今回、そのうちの一偈について、「一致はしないが類似する偈頌が MSA に存在する」ことが判明した⁷。この指摘のもつ意味については当該箇所や Horiuchi 2022 を参照されたい。

また、本箇所では、仏法を聞くことができない八つの状態、すなわち八無暇あるはいわゆる八難への言及があり、徳慧は詳細に『八無暇経』を引用している。上野は松田和信教授(佛教大学)より『三啓集(*Tridandamālā*)』所収の梵文対応箇所の写本画像を提供いただき、別途その経文の校訂テキストと和訳を取

6 これについてはさらに、李 2001:30, fn. 52、上野 2015:220, fn. 15 を参照。

7 Horiuchi 2022.

り上げたが(上野 2020)、今回その成果を反映することができた。松田教授のご厚誼に謝意を表す。なお、『釈軌論』のような翻訳チベット語文献を正確に読むためには、関連文献の梵本写本にまで適宜さかのぼらねばならないということをここに再確認しておきたい。

本稿ではさらにコロフォンに基づく『釈軌論』、『釈軌論注』の翻訳状況についても考察を加えることができた。なお、偈頌の出典や若干の箇所を読みについて不明な点も残ったので、そのような箇所は明記しておいた。識者からのご教示を頂戴できれば幸甚である。

本翻訳研究の対象範囲についての梗概

以下、『釈軌論』第5章の梗概を示す。本翻訳研究の対象範囲については太字で表示する。

- 5.0 敬聴について説明するための手順
- 5.1 [敬聴に向けて] 発奮させること
- 5.2 [敬聴の] 目的を明示すること
- 5.3 落ち込み・居眠り、誤解によって、心が沈み、心が乱れた者たちに
対し、珍奇な〔話〕、面白い〔話〕、厭離の話をする事
- 5.3.1 珍奇な話
- 5.3.2 面白い話
- 5.3.3 厭離の話
- 5.3.3.1 安穩を得ていないのに寝てしまう過失に関する厭離の話
- 5.3.3.2 欲望の対象の過失に関する厭離の話
- 5.3.3.3 不善の対象に関する厭離の話
 - 5.3.3.3.1 第1 解釈
 - 5.3.3.3.2 第2 解釈
- 5.3.3.4 趣は力なく消滅する性質を有するという厭離の話
- 5.3.3.5 正法に対して努力しない諸原因に関する厭離の話
 - 5.3.3.5.1 第1 解釈
 - 5.3.3.5.2 第2 解釈
- 5.3.3.6 5つの過失を有する誤った行為に関する厭離の話

- 5.3.3.6.1 本論：5つの過失を有する誤った行為
 5.3.3.6.2 余論：韻文 [A] に出る *aho* の語義解釈
 5.3.3.7 八無暇に関する厭離の話
 5.3.3.8 カポータ・マーリニーに因んだ厭離の話
 厭離の話の結語と 5.3 全体のまとめ

**Sūtrāṃkāra* における経典解釈法

『釈軌論』の結偈

『釈軌論』の奥付

5 『釈軌論』第 5 章 翻訳 (続き)

5.3.3 厭離の話

5.3.3.1 安穩を得ていないのに寝てしまう過失に関する厭離の話

(VyY, D shi 130b1-131a6 ; P si 151b1-152b1)

どのように厭離の話をすべきか。

[A] 人間たちの寿命は 100 年であり、夜に眠るため半分となる。

か [の寿命] は昼にも眠るため、その半分も [さらに] 小さな欠片となる⁸。

[B] 命は、ヤマ (**yama*) の車輪と刃歯をもっている⁹ というのに¹⁰、生き物のように眠ってしまうのであるから、

8 当該詩節のうち、この [A] のみが『ブトン佛教史』に引用される (BU 45.4-8, Obermiller 1931 : 79-80)。

9 *gshin rje'i 'khor lo sog ler ldan na* : この韻文には *'khor lo sog ler ldan* 「鋭い車輪をもつ」とあるが、世親自身がそれを散文で敷衍する箇所には *'khor lo dang sog le dang ldan pa* 「車輪と刃歯をもつ」とあるため、散文に基づきそのように訳した。*gshin rje'i 'khor lo* は *samsāracakra*, あるいは *bhavacakra* と通称され、『根本説一切有部毘奈耶』卷第三十四に具体的な図様が描かれる「五趣生死輪図」を指すであろう。*sog* は車輪の中芯 (ハブ、轂) である。*sog le* は「のこぎり」「刃の歯」の意味であり、5本のスポーク部位 (輻) に相当しよう。あたかも車輪が回り続けるように、有情が生死輪廻を繰り返す様を示したものである。つまりは「命は、ヤマの車輪と刃歯をもっている」とは輪廻の渦中にある、というほどの意味であろう。

10 徳慧注によれば「ヤマの車輪と刃歯をもっていること」は生命が安穩に至っていないことを意味する (本稿の注 no. 15 を付した箇所を参照)。また、世親によれば「安穩ノ

いかなる〔授記〕を得ることで、安穩に到るといふのか。何を証得して、妨げが幾許ほど断じられるといふのか。

諸悪趣を超える話とは何か。何もせずに、定業が何らか〔の果報〕を得るといふのか。

随眠という炎に焼かれる諸有の地を、いったい誰が超越したと語るのか¹¹。

↳に到ったならば眠ることは妥当であるが、未だ到っていないのであれば眠ることは妥当でない」といふ。したがってこの前半部分は逆説であり、「～にもかかわらず」と続くのであろう。

- 11 難解である。以下にチベット訳テキストを提示しておく。

[A] mi nmams tshe ni lo brgya la || mtshan mo nyal bas phyed du byas ||

de ni nyin par yang nyal bas || de yi phyed kyang dum bur byas ||

[B] srog ni gshin rje'i 'khor lo sog ler ldan na gson 'drar gang phyir nyal byed pa ||

ci zhig rnyed pa las ni dbuggs phyin ci zhig rtogs shing bgegs ni ci dag spangs ||

ngan 'gro nmams las rgal gtam ci yin mi bya'i nges pa'i las ni gang zhig thob ||

phra rgyas me nmams kyi bsregs srid pa nmams kyi sa ni gang zhig 'das pa smos ||

以上のとおり、『釈軌論』に引用される韻文 [A] はチベット訳にして7音節の4行詩であり、śloka の特徴を示している。他方、後続する韻文 [B] は17音節の4行詩であるため、一見して [A] と [B] は別の韻律による別の韻文に見える。しかし、下記の理由から、[A] と [B] は Śārdūlavikrīḍita による単一の韻文であったと考え得る。

まず、[A] は様々な文献に平行句がみられる。たとえば、Bhartrhari, *Śatakatraya* の第3, *Vairāgyaśataka*, k. 49 に次のようにある (D. D. Kosambi, *The Epigrams Attributed to Bhartrhari*. Bombay: Singhi Jain Series 23, 1948; 『離欲百頌』第49偈 = 上村1998: 141)。

āyur varṣaśataṃ nṛṇāṃ parimitaṃ rātrau tadardhaṃ gataṃ

tasyārdhasya parasya cārdham aparaṃ bālatavṛddhatvayoḥ |

śeṣaṃ vyādhiviyogaduḥkhasahitaṃ sevādibhir nīyate

jīve vāritaraṅgacañcalatare saukhyaṃ kutaḥ prāṇinām ||

人々の寿命は百年に限られている〔が〕、夜には〔睡眠により〕その半分となる。

その残りの半分のうちの半分は、幼年期と老年期から成る。

病気や離別の苦しみに伴われた残りは、奉仕(仕事)などに費やされる。

水の波のように非常に不安定な人生において、どうして人々に安楽があるのか。

韻律は Śārdūlavikrīḍita である。Apte s.v. はこの韻文を āyus の例文として引く。また、*Mahāsubhāṣitasamgraha* 5148 偈とも平行する有名な韻文である。ただ、次の韻文(5149)では形がやや異なる (L. Sternbach, *Mahāsubhāṣitasamgraha*, Vol. III, Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute, 1977)。

āyur varṣaśataṃ nṛṇāṃ parimitaṃ rātrau tadardhaṃ hṛtam

tasyārdhasya ca kiṃcid eva jarayā bālyena kiṃcid hṛtam |

【第1 解釈】

これ(偈)によって、何が説かれているのか。2つの因によって、安穩のない〔状態〕から安穩を得た命が生き物のように眠るのは妥当であるが、さもなくばそうではない〔と説かれた〕。

いかなる2つの因によってか。(1) 授記を得ることによっては、証得がなくとも、例えばある者に対し「この劫のあらん限り、墮落する(悪趣に墮ちる)ことはなく、〔最後は〕涅槃するであろう」と授記されるように。

(2) 果報を得ることによっては、「何らか〔の果報〕を得る」ことによって¹²、悪趣をもたらす煩惱・生・業という見所断の〔諸〕雑染と、再生をもたらす煩惱・生という2つの雑染を尽くす〔ように〕。

悪趣をもたらす(*āpāyika¹³)業を断じた者には、再生をもたらす(*paunarbhavika¹⁴)業雑染が〔もはや〕確立することはない。再生は善〔業〕の果報だからである。

そ〔の第2の偈〕の中で、ヤマの車輪と刃歯をもっていることによって、命

↘ kiñcid vyādhiviyogaḍukhamaraṇair bhūpālasevārasair

naṣṭam śiṣṭam atas taraṅgataralam puṁsām sukham kva kṣaṇe ||5149||

さらに、とある系統の *Garuḍapurāṇa* では次のようである (Ed. by Khemarāja Śrīkṛṣṇadāsa. Bombay: Śrī Venkateśvara Steam Press, 1906)。

āyur varṣaśatam nṛṇām parimitam rātrau tadardham gatam

tasyārdhasthitakiñcid ardham adhikaṁ bālyasya kāle gatam |

kiñcid bandhuviyogaḍukhamaraṇair bhūpālasevāgatam

śeṣam vāritaraṅgagarbhacapalam mānena kiṁ māninām ||1.115.28||

このように、当該詩頌は人口に膾炙したものであり、様々なヴァリエーションがあったようである。以上の文献は世親より後代のものであろうが、『釈軌論』にみられるこの偈頌も世親自作のものではなく、何らかの引用であったと考えてよいのではないか。翻って、[A] と [B] を見れば、[A] は Śārdūlavikrīḍita による a 句である (mtshan mo nyal bas で rātrau と読んだ場合)。『釈軌論』のチベット訳は全体的にみて質が高いが、韻律に関してはやや不注意などところがある (堀内 2016: 69, fn. 452)。ゆえに、ここで7音節の4行詩と17音節の4行詩は、Śārdūlavikrīḍita による単一の韻文であったと考え得る。

12 gang zhig thob pas: gang zhig thob は韻文の中の文句である。

13 Cf. BHSD s.v. āpāyika.

14 Cf. BHSD s.v. paunarbhavika.

が安穩に到っていないことが示された¹⁵。

「いかなる〔授記〕を得ることで、安穩に」という〔句〕によっては、授記を未だ得ていないことが示された。

「何を証得〔して〕」とは、〔善い〕果報が得られていないからである。

「妨げが幾許ほど断じられるというのか。諸悪趣を超える話とは何か。何もせずに、定業が何らか〔の果報〕を得るというのか」とは、果報を得た後に、悪趣をもたらす煩惱・生・業という〔諸〕雑染、〔すなわち〕尽くされる〔べき〕ものが尽くされていないことが示された。

見所断の諸煩惱は現観にとって妨げであるから「妨げ」と説かれた。

さらに、煩惱にはその生雑染の能力があると示すために、〔煩惱雑染と業雑染の〕中間にそれ（生雑染）が言及されている。〔生雑染が中間に言及されているのは、〕悪趣をもたらす生・業という2つの雑染が自他を害するものに関するものだからでもある¹⁶。

「随眠という炎に焼かれる諸有の地を、いったい誰が超越したと語るのか」とは、再生をもたらす煩惱・生という2つの雑染が尽くされていないことが〔順に〕示された¹⁷。

総括偈は、

如実なる意は安穩である。けれども、(1) 授記を未だ得ていない者と、悪趣

15 本稿の注 no. 10 に注記した内容が当該箇所を示されている。

16 徳慧注によれば、自己を害するのが生雑染、自他を害するのが業雑染。

17 当該詩節がそこまでを含意していたかはさておき、世親・徳慧による理解は以下のとおりであろう。

(1) 「いかなる〔授記〕を得ることで」	授記が得られていない
(2) 「妨げが幾許ほど断じられるというのか（＝煩惱雑染）」 「諸悪趣を超える話とは何か（＝生雑染）」 「何もせずに、定業が何らか〔の果報〕を得るというのか（＝業雑染）」	悪趣をもたらす雑染（煩惱・業・生雑染） ＝見所断が断じられていない （それを断じた者が有学）
(3) 「随眠という炎に焼かれる諸有の地を、いったい誰が超越したと語るのか」	再生をもたらす雑染（煩惱・生雑染） ＝修所断が断じられていない （それを断じた者が阿羅漢）

をもたらす・再生をもたらすところの、煩惱（雑染）の3つ〔の支分〕・2つの支分を〔これから〕尽くすべきであるため、(2) その真実を証得していない者が〔いる〕¹⁸、¹⁹

【第2 解釈】

さらに〔別の解釈では〕、2つの因によって、先と同様に安穩を得るといわれる。(1) 退くことのない加行道を得ることによっては、順決択分の忍を得るからである²⁰。(2) 果報を得ることによっては、「何らかの〔果報〕を得る」ことによって、〔と〕先〔述〕のとおりである。

【第3 解釈】

さらに〔別の解釈では〕、3つの因によって、先と同様に安穩を得るといわれる。いかなる3つ〔の因〕によってか。(1) 授記を得ることによって、(2) 殊勝なる智を得ることによって²¹、(3) 殊勝なる断を得ることによって²²。

(3) 殊勝なる断も、上述した悪趣をもたらす3種の雑染の断と、上述した再生をもたらす2種の雑染の断の如くである。

18 別の観点からいえば、授記を得た者と、真実を証得した者は、その意が安穩であるということの意味する。

19 以下にチベット訳テキストを提示しておく。

ji lta bzhin pa'i yid ni dbugs phyin pa'i ||
lung bstan pa ni thob pa med pa dang ||
ngan song dang ni yang 'byung 'gyur ba gang ||
nyon mongs yan lag gsum gnyis zad bya'i phyir ||
de kho na nyid de rtogs pa med pa'o ||

20 Cf. AKBh 344.10: *adhimātrasatyakṣamaṇād aparihānitaḥ*. 「〔ここに至ればもはや〕退くことがないゆえ〔ここでは〕最も優れて諦を認得するから〔忍 (kṣānti) と呼ばれる〕。」(櫻部・小谷 1999: 119 より訳文を抜粋)

21 徳慧注によれば、詩節中の「何を証得して」が対応する。

22 世親が挙げる「安穩を得るための諸因」をまとめれば以下のとおり。

第1 解釈	授記を得ること	果報を得ること	
第2 解釈	後退しない加行道を得ること	果報を得ること	
第3 解釈	授記を得ること	殊勝なる智を得ること	殊勝なる断を得ること

徳慧注 (VyYṭ, D si 294b1-295b1 ; P i 184b6-186a6)

【第1 解釈】

生き物のようにとは、生き物の如くに。

「何らか〔の果報〕を得る」ことによってと詳細に出ているのは、「何らか」の果報を「得ることによって」、「悪趣をもたらすもの」、すなわち悪趣という果報を有するものである。

煩惱・生・業という見所断の諸雑染を尽くす²³。

まず、以上のことは有学の況位を主題として説かれた。〔次に、〕「再生をもたらすもの」、すなわち、再生という果報を有するところの煩惱・生という修所断の2つの雑染を断じているのが阿羅漢である。

業雑染は言及されていない。なぜか。悪趣をもたらす業を断じた者には、再生をもたらす業雑染が〔もはや〕確立することはない。再生は善〔業〕の果報だからである。というのは、有学たちにとっての再生は、異生の況位から積み重ねられたところの、順後受 (*aparaparyāyavedanīya, 来々世以降に果報を享ける) の善業と、順次受 (*upapadyavedanīya, 来世に果報を享ける) 〔の善業〕の果報だからである。なぜか。有学の況位にとっての〔果報は〕再生をもたらすものではない。彼らの有漏の善にとっての〔果報〕である。彼は尽きることを喜ぶからである。

見所断の諸煩惱は現観にとって妨げであるからである。この偈に「妨げ」と説かれているから、修所断の諸〔煩惱〕が真実 (諦) を現観するものたちにとって妨げとなっていない。こ〔の段階〕では見道における見所断の諸〔煩惱〕のみの諸の得 (*prāpti) が断じられるのであって、修所断の諸〔煩惱の諸の得が断じられるの〕ではない²⁴。

23 この一文は、世親本論の「悪趣をもたらす煩惱・生・業という見所断の〔諸〕雑染と、再生をもたらす煩惱・生という2つの雑染を尽くす」(ngan song ba'i nyon mongs pa dang | skye ba dang | las kyī kun nas nyon mongs pa mthong bas spang bar bya ba rnam's dang | yang 'byung ba pa'i nyon mongs pa dang | skye ba'i kun nas nyon mongs pa gnyis zad pa yin no ||) という記述のうち、太字箇所引用である。

24 次の3段階が想定されている。

- ・授記を得る = 未証得
- ・悪趣をもたらす雑染 (煩惱・業・生雑染) = 見所断を断ずる
- ・再生をもたらす雑染 (煩惱・生雑染) = 修所断を断ずる

さらに、煩惱にはその生雑染の能力があると示すために、中間にそれが言及されているとは、煩惱と業という2つの雑染の中間に生〔雑染〕が言及されている、という意味である。どのようにか。

妨げが幾許ほど断じられるというのか。

諸悪趣を超える話とは何か。何もせずに、定業が何らか〔の果報〕を得るというのか。

と〔いうように〕である。

悪趣をもたらす生・業という2つの雑染が自他を害するものに関するものだからでも、中間にそれ（生雑染）が言及されているのもである。その中で、自己を害するのは生雑染である。自他を害するのは業雑染である。

悪趣をもたらす・再生をもたらすところの、煩惱（雑染）の3つ〔の支分〕・2つの支分を〔これから〕尽くすべきであるため。

「煩惱²⁵の3つの支分を尽くすべきであるため」、すなわち悪趣をもたらす煩惱雑染など〔の3つの雑染〕を尽くすべきであるため、(2) その真実を証得していない者が〔いる〕。

「煩惱の2つの支分を尽くすべきであるため」、すなわち再生をもたらす煩惱・生〔という2つの雑染〕を尽くすべきであるため、〔未だ〕その真実を証得していないという意味であって、随眠という炎に焼かれる諸有のと詳細に出ている〔偈〕によって〔示された〕。

〔以上のことは〕有学の況位を主題として解説されたのであって、先と同様である。どのようにか。2つの因によって、安穩のない〔状態〕から安穩を得た命が生き物のように眠るのは妥当であるが、さもなくばそうではないとある。

いかなる2つの因によってか。(1) 授記を得ることというこの因を除いて、である。

25 世親本論にある総括偈に対する注釈である。総括偈には *nyon mongs* とあるが、実質的には *kun nas nyon mongs pa, *samkleśa* 「雑染」を指す。*nyon mongs pa, *kleśa* 「煩惱」ではない。したがって、総括偈にある *nyon mongs* との表記は韻律ゆえの省略形であろう。

【第2 解釈】

さらに別〔の解釈〕が解説されている。退くことのない加行道を得ることによって、順決択分の忍を得るからである。それ（順決択分の忍）を得るから、退くことのない加行道を得る。さらに、それ（順決択分の忍）を得ることで、悪趣に趣かない²⁶。

果報を得ることによっては、「何らかの〔果報〕を得る」ことによって、〔と〕先〔述〕のとおりである。どのようにか。「何らか〔の果報〕を得る」ことによって、悪趣をもたらす煩惱と詳細に出ている。

いかなる〔授記〕を得ることで、安穩にという〔偈〕によっては、退くことのない加行道が得られないことが示された。

何を証得してとは、果報が得られないことを。

先と同様である。どのようにか。安穩のない〔状態〕から安穩を得た命が生き物のように眠るのは妥当であるが、さもなくばそうではないと〔本論に説かれている〕。

【第3 解釈】

いかなる3つ〔の因〕によってか。(1) 授記を得ることによっては、先と同様である。

「得ること」を2種に区分して解説する。(2) 殊勝なる智を得ることによって、(3) 殊勝なる断を得ることによって。

(3) 殊勝なる断もと詳細に出ている。その中で、いかなる〔授記〕を得ることで、安穩にとは、授記が得られないことが示された。何を証得してとは、殊勝なる智が得られないことが示された。

5.3.3.2 欲望の対象の過失に関する厭離の話

(VyY, D shi 131a6-131b3 ; P si 152b1-7)

対象を分別して気が散っている者たちに対して、対象の過失の説明を含んだ厭離の話²⁷を語るべきである。

26 Cf. 『俱舍論』「賢聖品」第23偈b句。AKBh 348.4 ad AK VI.23b : *kṣāntilābhy anapāyagaḥ* | 「忍を得た者は悪趣に行かぬ」(櫻部・小谷 1999 : 148)

27 前節が *skyo ba'i gtam* であるのに対し、今節は *kun tu skyo ba'i gtam* であるが、双ノ

世間において、諸の欲望〔の対象〕は（1）無常であり、（2）善の対象を強奪し、（3）空虚であり、（4）幻に似ており、
（5）〔欲望の対象〕願う時にすら人々の心を愚昧〔にするの〕であれば、自分自身が遭遇した際に〔愚昧にすること〕は言うまでもない²⁸。

そ〔の偈〕の中で、諸の欲望〔の対象〕が（1）無常であることによっては、他ならぬ現法（現世）における憂いなど²⁹の原因であることが示された。

（2）善の対象を強奪するものであることによっては、来世における悪趣の原因であることが〔示された〕。

（3）空虚であることによっては、善を離れていることが〔示された〕。

（4）幻に似たものであることによっては、安楽のようなものとして顕われていることが〔示された〕。安楽であるとの想念という顛倒（*sukhasamjñāvi-

↘ 方に大きな差異はないと思われるため、同じ「厭離の話」という訳語を充てる。

28 出典は馬鳴（Aśvaghōṣa）の『ブッダチャリタ』（*Buddhacarita*）。つまり当該箇所は『ブッダチャリタ』に対する世親の注釈でもある。BC 11.9:

kāmā hy anityāḥ kuśalārthacaurā riktāś ca māyāsadrśāś ca loke ||

āśāsyamānā api mohayanti cittam nṛṇām kiṃ punar ātmasamsthāḥ ||

韻律は *indravajrā* である。チベット訳『釈軌論』の a 句冒頭には 'jig rten dag na と複数形であるが、梵本では *loke*（単数形）とある。後者が自然であろうから、『釈軌論』の和訳もそのように訂正して訳した。以下、チベット訳『ブッダチャリタ』を示す。

mi rtag 'dod pa rnams kyis dge ba'i nor brku zhing ||

stong pa rmi lam sgyu ma dang mtshungs 'jig rten na ||

yid la smos pa yis kyang rmongs par byed pa ste ||

mi yi sems ni bdag nyid gnas pa smos ci 'tshall|| (BCt, D ge 39a5-6)

以下、『釈軌論』所引のテキストを示す。

'jig rten dag na 'dod pa rnams(1)mi rtag ||

(2)dge ba'i don 'phrog (3)gsog dang¹(4)sgyu ma 'dra ||

(5)smon pa na yang mi rnams kyi ni sems ||

rmongs na bdag nyid phrad² na smos ci dgos ||

¹ dang VyY(D) : der VyY(P)

² phrad VyY(P) VyYṬ(DP) : phred VyY(D)

29 *mya ngan la sogs pa* : *śoka 「など」については、『声聞地』第二瑜伽処にある次の記述を参照。ŚrBh II 114.2-4 : *ye punar anityās te śokaparidevaduhkhadaurmanasyopāyāsadharmāṇaḥ.*

paryāsa³⁰)の根拠だからである。

(5) 後半の半〔偈〕によっては、それら(諸の欲望の対象)は〔まだ実際には〕遭遇していなくとも、安楽であると想念させることによって、渴愛を有する者たちの心を愚昧にするのであれば、〔自分自身が実際に〕遭遇した際に〔愚昧にすること〕は言うまでもない、と示された。

2つの総括偈が〔ある〕。

諸の欲望〔の対象〕は、苦の原因であり、それら(諸の欲望の対象)に安楽はなく、安楽であるとの想念という顛倒の根拠であると示された。

癡病〔に罹患した者〕のように煩悶するから³¹、憂いと悪趣の原因であるから、〔諸の欲望の対象と〕遭遇していない・遭遇した状態において、幻のように誤ったものであると示されたから³²。

徳慧注 (VyYṬ, D si 295b1-4 ; P i 186a6-b2)

(4) 安楽であるとの想念という顛倒の根拠だからである。

それら安楽に非ざるものを安楽であるとする想念であって、煩悶を伴う安楽であるから、〔全く〕別のものであるように。

30 四顛倒のひとつ。梵本としては『阿毘達磨灯論』に類似表現が見られる。AD 316.5 : duḥkhe sukhasamjñāviparyāsapratipakṣo vedanāparīkṣā.

三友 2007 : 658 を参照。なお、徳慧はこの複合語を KDh. として解釈する。

31 『俱舍論』「界品」に引用される「欲望が満たされないと矢で射られたかのように苦しむ」との『アルタ・ヴァルギーヤ(義品)』(Arthavargya)の偈が想起される (AKBh 9.12-14 ; 櫻部 1969 : 162. AKUp 1015, 本庄 2014a : 87-88)。

32 以下にチベット訳テキストを提示しておく。

'dod pa rnams ni sdug bsngal rgyu ||
de dag la ni bde ba med ||
bde bar 'du shes log pa yi ||
gzhi yin par ni rab tu bstan ||
mdze bzhin yongs su gdung bas na ||
mya ngan ngan 'gro'i rgyu yi phyir ||
ma phrad phrad pa'i gnas skabs su ||
sgyu¹ bzhin log par ston phyir ro ||

¹ sgyu] em. ; rgyu VyY(D) : skya VyY(P)

その、安楽であるとの想念自体が顛倒なのである³³。

その根拠が安楽であるとの想念という顛倒の根拠 (Tp.) であって、すなわちその基盤である。

それゆえ、安楽であるとの想念であって、すなわち、まさしく安楽であるという顛倒の根拠だからである。

さて、(5) 後半の半【偈】によっては、それらとは詳細に出ていることによって、どのようにそれら (諸の欲望の対象) が愚昧にするかが示された。

(5) 【諸の欲望の対象を】願う時にすら人々の心を愚昧【にするの】であれば、自分自身が遭遇した際に【愚昧になってしまうこと】は言うまでもない。

という【半偈】によって、それら (諸の欲望の対象) は【まだ実際には】遭遇していなくとも、安楽であると想念させることによって、渴愛を有する者たちの心を愚昧にするのであれば、【自分自身が実際に】遭遇した際に【愚昧になってしまうこと】は言うまでもない、と示された。

願う時とは、望んだ時に、求めた時に。

2つの総括偈であって、内容のとおりに説かれた [2つの総括偈がある]。

5.3.3.3 不善の対象に関する厭離の話

5.3.3.3.1 第 1 解釈 (VyY, D shi 131b3-132a4 ; P si 152b7-153b1)

(1) 知り難く、(2) 覆し難く、(3) 抗い難い軍勢を有し、(4) 動きを推測し難く、(5a) 貪りをほしいままにする感官を有する者たちにとっては (5b) 賢者たちの道を攻撃するものであり、(6a) 塵が積もった者たちにとっては (6b) 信解と知の敵であり、(7a) 意が迷乱した者たちにとっては (7b) 戒を潰滅させるものであり、[総じて、] 生き物たちにとっては富の如き善を壊すものである、諸の不善の対象は³⁴。

33 世親本論の*sukhasamjñā-viparyāsa という複合語を KDh. で解釈したことを示す注釈である。

34 松田和信教授のご教示により、『三啓集』の第 26 三啓経 (第 3 ダンダ) から梵文が回収可能であることを知った。以下、Suvadanā の韻律で再構成されたローマ字転写テ

どうして、(5b) 賢者たちの道を攻撃するものであるのか。在家者の側では、(5a) 貪りをほしいままにする感官を有する者たちにとっては十善業道の訓戒などから逸脱させる点で。

どうして、(6b) 信解と知の敵たちであり、(7b) 戒を潰滅させるものであるのか。出家者の側では、(6a) 前〔世〕の塵³⁸が積もっており、(7a) 現世において意が迷乱した者たちにとっては〔それぞれ〕定と慧と戒を妨害する³⁹からであり、順序どおりである。信解は心の中に位置するものであるから定（三昧）である。

どうして、生き物たちにとっては富に等しい善であるのか。現世と来世において、〔それぞれ〕楽〔の原因〕と、苦〔より〕救い出す原因そのものである点で、財に等しいからである。

どうして、〔その富に等しい善が〕諸の不善なる対象によって壊されるのか。非如理作意の際に、それ（不善なるもの）とは対立するものである、獲得された・獲得されていない善なる諸法から衰退する点で⁴⁰、衰退させるものだからである。

ゝること〕である。(2)については堀内2016:71, fns. 463, 464 および経節(38)を参照。

38 徳慧注によれば、「前〔世〕の塵」は煩惱を指す。

39 徳慧注によれば、(6b)「信解の敵たち」は定を、同じく(6b)「知の敵たち」は慧を、(7b)「戒を潰滅させるもの」は戒を、それぞれ妨害する。

40 *dge ba'i chos rnam las thob pa dang | ma thob pa yongs su nyams pa* : 『大乘莊嚴經論釈』(MSA 18.7ab に対する注釈部)の例から**prāptāprāptakuśaladharmaparihāni* が対応梵文として想定される。MSABh 133.14-15: *ity anena dṛṣṭadharmasāmparāyikam avadyam prasavatīti samdarśitam. prāptakuśaladharmaparihānitāḥ, aprāptaparihāniṭaś ca yathākramam.* 「というこの半偈によつては、今世と来世との(両方にわたる)過失が生じるということが示された。順次、既に獲得した善法を喪失するから、また未だ獲得していない(善法)をも喪失するからである。」(長尾2009:199より訳文を抜粋)。下線部に対応するチベット訳文は以下のとおり。MSABht, D phi 221a6: *dge ba'i chos thob pa las yongs su nyams pa dang | ma thob pa las yongs su nyams pa dang.*

さて、世親本論には *dge ba'i chos rnam las thob pa ...* とあり(徳慧注も同様)、「善なる諸法からの得と非得が衰退している」と訳せようが、問題がある。「善なる諸法からの非得が衰退している」のであれば、むしろ歓迎すべき事柄であるため、意味の上からも、助詞 *las* と過去分詞 *yongs su nyams pa* の結びつきからいっても、**dge ba'i chos rnam las thob pa dang | ma thob pa las yongs su nyams pa* とあるべきものである。

【第1 解釈の要義】

そして、要するに、これ(偈)によっては、諸の欲望〔の対象〕が、(I) 遍知し難いこと、(II) 断じ難いこと、(III) 遍知せず断じない場合には⁴¹ どのように(ji ltar)、何が(gang)、誰々(gang dag la)を害するか⁴²、というそのことが示された。(I) 1句 [= (1)]、(II) 3〔句〕 [= (2) (3) (4)]、(III) 残りの3〔句〕⁴³ [= (5b) と (6b, 7b) と (5a, 6a, 7a)] であって、順序どおりである⁴⁴。

41 (III) 前半部の yongs su ma shes shing ma spangs pa dang は独立した1項目のように見えるが、偈に対応句がないことから、dang を並列ではなく「～の場合には」という意味で理解した。

42 世親による要義の説明は簡潔であるものの、当該箇所テキストに混乱がみられる。特に要義(III)。世親本論のテキストは以下のとおり。(III) yongs su ma¹ shes shing ma spangs pa dang | ji ltar² gang dag³ gang dag la gnod par⁴ byed pa de yongs su bstan te |

¹ ma VyY(D) VyYT̄(DP) : om. VyY(P)

² ltar VyY(D) VyYT̄(DP) : ltar ltar VyY(P)

³ gang dang VyY(DP) : gang zhig ni VyYT̄(DP)

⁴ par VyY(D) VyYT̄(D) : pa VyY(P) VyYT̄(P)

これに対応する徳慧注のテキストは以下のとおり。

(III) yongs su ma shes shing ma spangs pa dang | ji ltar gang zhig ni gang dag la gnod par¹ byed pa de ni tshig gsum dag gis yongs su bstan te |

¹ par VyYT̄(D) : pa VyYT̄(P)

双方の間に異読はあるものの、両者とも要義(III)に3項を含める点で共通する。つまり、以下のとおり。

世親本論 : ji ltar / gang dang / gang dag la gnod par byed pa

徳慧注 : ji ltar / gang zhig ni / gang dag la gnod par byed pa

徳慧注の gang zhig ni は世親本論の gang に対応する異訳であろう (VyY(P) : ji ltar ltar は奇怪だが、ji ltar dang の scribal error である可能性があろう。その場合も ji ltar dang / gang dang / gang dag la gnod par byed pa)。想定原文は*yathā yat yeṣu ca といったところか。以下、要義(III)の3項を順に(III.1)、(III.2)、(III.3)とする。

43 テキストの異読に即して読みが分かれる難しい箇所である。世親本論のテキストは以下のとおり。

tshig gcig dang gsum dang gsum lhag ma¹ ste go rims bzhin no ||

¹ gsum lhag ma VyY(D) : gsum dang lhag ma VyY(P)

VyY(D) を採れば「(I) 1句と (II) 3句と (III) 残りの3句」となり、VyY(P) を採れば「(I) 1句と (II) 3句と (III) 3句と残り」となる。徳慧注は前者(デルゲ版)を支持し、そして前者がより整合的と判断されるため、前者の異読を採用。

44 世親の説明を整理するため、徳慧注にしたがって、総括偈の(5)~(7)の各個を、

徳慧注 (VyYṭ, D si 295 b5-296b2 ; P i 186b2-187b4)

【韻文の語句の注釈】

(3) 抗い難い軍勢を有しとは、ある諸のものにとって軍勢が抗い難いもの (Bv.)、それらが「抗い難い軍勢を有し」という意味である。

【第 1 解釈】

「これらの欲望〔の対象〕は」と詳細に出ているのは、

これらの欲望〔の対象〕は、利が少なく、苦が多く、過患が多い。現世では、利が少なく、過患が極めて多いからである。

と詳細に結びつく。

順序どおりである。どのようにか。(2) 除去という断が難しい点で、(2) 覆し難くである。

(3) 制圧という断が難しい点で、(3) 軍勢に抗い難くである。

(4) 随眠の壊滅という断⁴⁵が難しい点で、(4) 動きを推測し難くである。

↘ (5a) (5b) というように二分する。

- ・ (5a) 貪りをほしのままにする感官を有する者たちにとっては (5b) 賢者たちの道を攻撃するもの
- ・ (6a) 塵が積もった者たちにとっては (6b) 信解と知の敵
- ・ (7a) 意が迷乱した者たちにとっては (7b) 戒を潰滅させるもの

その上で、世親による対応づけは以下のようなだろう。

要義	対応句
(I) 不善の対象は遍知し難いこと	(1)
(II) 不善の対象は断じ難いこと	(2) (3) (4)
(III.1) 遍知せず断じない場合には、どのように害するか	(5b)
(III.2) 遍知せず断じない場合には、何が害するか	(6b) (7b)
(III.3) 遍知せず断じない場合には、誰々を害するか	(5a) (6a) (7a)

45 yang dag par spang bar VyYṭ(DP) : spong ba VyY(DP). 同じ徳慧注においても上記 (2) (3) に yang dag par はない。また (4) のみ接頭辞 samyak- がつくとともに考えにくい。そのためここでは yang dag par の原語を接頭辞 sam- と判断して (つまり、samyak-prahāna, 正断ではないものとして) 読んだ。あるいは、テキストから yang dag par を削除すべきかもしれない。

その中で、(2) 除去という断は、除去そのものが断である〔という KDh. である〕から「除去という断」である。考察力(*pratisamkhyānabala⁴⁶)によって。次のとおり「これらの欲望〔の対象〕は、利が少なく、苦が多く、」云々と〔経に〕説かれているように。

(3) 制圧という断は、制圧そのものが断である〔という KDh. である〕から「制圧という断」である。世間道によって欲界の貪を離れる。

同様に、(4) 随眠の壊滅そのものが断である〔という KDh. である〕から「随眠の壊滅という断」である。出世間道によって有頂天から〔無色界の貪を離れる〕。「欲望は苦しい」⁴⁷と詳細に出ている。

(6a) 前〔世〕の塵が積もっておりと詳細に出ているのは、前世において積み重なった煩惱である。

(7a) 現世においてとは、現在世において。

意が迷乱した者たちにとってとは、心が散乱した者たちにとって。

定と慧と戒を妨害するからであり、順序どおりである。どのようにか。定を妨害するから信解の敵たちである。慧を妨害するから知の敵たちである。戒を妨害するから戒を潰滅させるものたちである。

現世と来世においてと詳細に出ているのは、現在世における楽の原因そのものである点で、財に等しいから、富に等しい善である。〔一般に〕知られている富と性質が共通するからである。

同様に、来世における苦〔より〕救い出す原因そのものである点で、財に等しいから、富に等しい善である。〔一般に〕知られている富と性質が共通するからである。

獲得された・獲得されていない善なる諸法から衰退する点で、衰退させるものだからである。獲得された善なる諸法から衰退している点で衰退させるものだからであり、獲得されていない同じそれら〔善なる諸法〕から衰退している点で衰退させるものだからである。

46 so sor rtog pa'i stobs kysis te : 堀内 2016 : 71, fns. 463, 464, および経節 (38) を参照。

47 出典不詳。先の経典と同一出典か。

【第1 解釈の要義】

そして、要するにと詳細に出ているのは、そして、要するに、この偈によっては、諸欲〔の対象〕は（Ⅰ）遍知し難いことが、ひとつの句によって示された。「(1) 知り難く」というこ〔の句〕によって。

（Ⅱ）断じ難いことは、3つの句によって示された。「(2) 覆し難く、(3) 抗い難い軍勢を有し、(4) 動きを推測し難く」というこれら〔の句〕によって。

（Ⅲ）遍知せず断じない場合には、どのように、何が、誰々を害するか（**ji ltar gang zhig ni gang dag la gnod par byed pa**）、というそのことが、3つの句によって示された。

その中で、（Ⅲ.1）「(5b) 賢者たちの道を攻撃するものであり」というこ〔の句〕によって、まず、どのように〔害〕するか（**ji ltar byed pa**）、そのことが示された。

（Ⅲ.2）「(6b) 信解と知の敵であり」と、「(7b) 戒を潰滅させるものであり」というこの2つ〔の句〕によっても、多くの害をなすもの（**gnod pa mang zhig byed pa**）が示された。

（Ⅲ.3）残りの偈によっては、誰々を害するか（**gang dag la gnod par byed pa**）、そのことが示された。どの〔句〕によってか。「(5a) 貪りをほしいままにする感官を有する者たちにとっては」と詳細に出ている〔句〕によって。

5.3.3.3.2 第2 解釈（VyY, D shi 132a4-b2 ; P si 153b1-7）

【第2 解釈】

さらに別の解釈では、諸の欲望〔の対象〕は盗賊と性質が共通することが示された。

盗賊の7つの諸原因によって、賊の振る舞いは完成する（**mthar phyin pa yin te**）。〔7つの諸原因はどれか。〕

(1^o) 動揺しないという本性があり、(2^o) 動揺しても退かない点で堅固であり⁴⁸、(3^o) 進んだり戻ったり他者を圧することに疲労しない点で力がある。

(4^o) わかりにくく、行きにくい場所に、遠く離れ、隠れて動き回り（*gaha-

48 brtan VyYT(DP) : bstan VyY(DP). VyYT(DP)に基づきテキストを brtan と修正する。

nopavicāra⁴⁹)、(5') [ひとつ] 残らず強奪する点で〔被害者に対する〕憐れみをもたず、(6') [相手が] 居眠りしたり、酒に酔っているときに攻撃する点で〔強奪の〕好機を熟知しており、(7') [世間(人倫)に] 敵対し敵意をもっている⁵⁰。

煩惱欲(*kleśakāma)と〔共なる〕諸の事物欲(*vastukāma)も、そうした〔盗賊〕と性質が共通する⁵¹。その中で、(1') 動揺しないという本性があることは、(1) 知り難いことによって示された。過患が遍知されることはないからである。

(2') 堅固であることが、(2) 覆し難いことによって〔示された〕。除去し難いからである。

(3') 力を有することが、(3) 抗い難い軍勢を有することによって〔示された〕。現行(*samudācāra)⁵²は制圧し難いからである。

(4') 遠く離れ、隠れて動き回ることが、(4) 動きを推測し難いことによって〔示された〕。随眠は遠いところに位置し、判明しない⁵³からである。

(5') 憐れみをもたないことが、(5b) (6b) (7b) (8b) 賢者の道を攻撃するなど⁵⁴のことによって〔示された〕。善〔根〕を残りなく無に帰すからである。

(6') 好機を熟知していることは、居眠りしたり、酩酊したりする酔っぱらいのような「(5a) 貪りをほしいままにする感官を有する者たち」〔など〕⁵⁵を攻撃するからである。

49 thibs por rgyu ba.

50 mi mthun zhing sha khon can : Mvy(S)2734, Mvy(IF)2741, vairī = sha khon. vairin は「敵意をもつもの」「敵」を意味するため、mi mthun の意味もそこから推測して「〔世間(人倫)に] 敵対し」と訳した。

51 「煩惱欲(*kleśakāma)と〔共なる〕諸の事物欲(*vastukāma)」は、『三啓集』韻文における viṣaya に対応する。

52 kun tu rgyu ba : 次項の「随眠」と対をなしている。潜在的な煩惱に対し、顕勢的な煩惱を指す。

53 mi mngon par song ba : あるいは「不明瞭に動く」か。

54 「など」には、(6b) (7b) (8b) が含まれると推測される。

55 bzang po'i lam nmams la 'joms : 異読はないものの、前後の用例を見れば 'joms は目的語に la を取らない。また、ここに (5a) のみが挙げられたと見るのは不合理であり、(6a) (7a) (8a) も含まれるべきである。したがって、当該箇所テキストには「など」に類する語が要求される。そのため、sogs pa が脱落したと理解し、nmams la <sogs pa>'joms とテキストを訂正した。つまり、第2解釈の「(6') 好機を熟知していること」に対応する第1解釈は、(5a) に加え (6a) (7a) (8a) も含み得ると見る。

(7') 敵対していることが、(9) 不善であることによって〔示された〕。善と矛盾するからである⁵⁶。

徳慧注 (VyYṭ, D si 296b2-5 ; P i 187b4-8)

(2') 堅固である。どのようにか。(2) 動揺しても退かない点で、である。

(4') 遠く離れ、隠れて動き回りである。どのように隠れて動き回るのか。わかりにくく、行きにくい場所にある。

〔(1') 動揺しないという本性があることが、〕(1) 知り難いことによって示された。「(1) 知り難く」というこの句によって。以上のとおり、適宜 (*sambhāvataḥ)、結びつけるべきである。

(5') 憐れみ(悲)をもたないことが、(5) (6) (7) 賢者の道を攻撃するなどのことによって。それらにとって (*yeṣām)、戒などという最初の賢者の道を攻撃することがある諸のもの (Bv.)、それらが「賢者の道を攻撃するなど」である。その抽象名詞が「賢者の道を攻撃すること」である。賢者の道を攻撃することそれ自体によって〔という意味〕である。

56 世親の説明をまとめれば以下のとおり。

第2 解釈 (盗賊の性質)	第1 解釈 (不善の対象の性質)
(1') 動揺しないという本性があること	(1) 知り難いこと
(2') 動揺しても退かない点で堅固であること	(2) 覆し難いこと
(3') 他者を圧することに疲労しない点で力があること	(3) 抗い難い軍勢を有すること
(4') 遠く離れ、隠れて動き回ること	(4) 動きを推測し難いこと
(5') 憐れみをもたないこと	(5 b) 賢者の道を攻撃するものであること (6 b) 信解と知の敵であること (7 b) 戒を潰滅させるものであること (8 b) 富の如き善を壊すものであること
(6') 好機を熟知していること	(5 a) 貪りをほしいままにする感官を有する者たちを攻撃する
(7') 敵対していること	(9) 〔欲望の対象が ⁵ 〕 不善であること

「(6) 信解と知の敵であり」と「(7) 戒を潰滅させるものであり」というこれらによって、善根を残りなく無に帰すからである。

5.3.3.4 趣は力なく消滅する性質を有するという厭離の話

(VyY, D shi 132b2-4 ; P si 153b7-154a2)

翌朝に灯火が風に靡く（吹き消される）ように⁵⁷、
水辺にある樹の根が揺れるように、
壊れた器の中にある水が漏れるように、
この趣（*jagat）は力なく消滅する性質を有している⁵⁸。

以上のとおり、趣が脆さ（*prabhāṅgura）という性質を有するものであるなら、あなたが正法を聴くことに動揺するのは適切でない。

なぜ、この偈では3つの喩えでもって説かれているのか。すなわち、趣と呼ばれる

57 この譬喩は文字どおり「風前の灯」という意味でも、あるいは夜間に求められる灯火も陽の昇る翌朝には風に吹き消されているという意味でも解釈することができよう。

58 松田和信教授のご教示により、『三啓集』の第9三啓経（第1ダンダ）と第38三啓経（第1ダンダ）から梵文が回収可能であることを知った。以下、Puspitāgrāの韻律で再構成されたローマ字転写テキスト（第9三啓経対応箇所）と漢訳平行資料の情報提供は松田教授による。

pavanacala iva prabhātadīpas tarur iva lo(17v1) laśipho nadītatasthaḥ |
jagad idam avasāṃ praṇāśadharmmi sra vad iva jarjarabhājanastham ambhaḥ ||
譬如嶮岸 大樹上有 大風下有 大水崩其根土。誰當信此樹得久住者。
人命亦如是。少時不可信。（『坐禪三昧經』 T15, 274c12-14）
世間轉壞 如風中燈 如險岸樹 如漏器盛 水不久空竭

（『大智度論』 T25, 229a25-26）

以上の3点から、世親が引用する当該韻文の作者は馬鳴であろう。以下に『釈軌論』所引韻文のチベット訳テキストを提示しておく。

nanḡ par mar me rlunḡ gis bskyod pa 'dra bar dang ||
chu bo'i 'gram gyi ljon shing rtsa ba 'gul 'dra bar ||
snod chag yod pa'i chu ni 'dzag par byed pa ltar ||
'gro ba 'di ni dbang med 'jig pa'i chos can yin ||

これは、寿の力⁵⁹によって名⁶⁰と色⁶¹が
起こる。〔名と色と寿の〕3つは、それゆえ、いかに
堅固でないか、というそのことが、〔順に、〕死去と倒壊と消尽に
直面しているところの灯火と樹と水〔の喩え〕でもって説かれている^{62, 63}。

徳慧注 (VyYT, D si 296b5-297a2 ; P i 187b8-188a7)

〔なぜ、この偈では〕3つの喩えでもって説かれているのかとは、灯火と樹と水〔の喩え〕でもって。

これは、寿の力によって名と色がと詳細に出ているが、それ(偈)の中で、「名」は無色の四蘊である。それに転変する(*namati, *namana)からである⁶⁴。

「色」は、四大種と四大種所造である。傷めつけられる(*rūpyate, *rūpaṇa)か

59 徳慧は「寿は、熱と識の2つにとっての拠り所たる法であり (AKBh 73.17 ad AK II.45b: *ādhāra ūṣmavijñānāyor hi yaḥ* |)、生命 (*jīvita) という〔語〕の同義異語である (AKBh 73.14 ad AK II.45a: *āyur jīvitam* |)」と注釈する。どちらも『俱舍論』根品の援用である。

60 徳慧は「名は無色の四蘊である。それに転変する (*namati, *namana) からである」と注釈する。『俱舍論』の語源解釈の援用である (AKBh 142.18 ad AK III.30: *teṣu teṣu artheṣu tasya nāmno namanāt.*)。

61 徳慧は「色は、四大種と四大種所造である。傷めつけられる (*rūpyate, *rūpaṇa) からである」と注釈する。

62 徳慧注に基づき対応関係を図示すれば以下のとおり。

譬喩	韻文の文言	譬喩により表される事柄
灯火の喩え	翌朝に灯火が風に靡く (吹き消される) ように	名が死去に直面していること
樹の喩え	水辺にある樹の根が揺れるように	色が倒壊に直面していること
水の喩え	壊れた器の中にある水が漏れるように	寿が消尽に直面していること

63 以下にチベット訳テキストを提示しておく。

'di ni tshe yi dbang gis ming dang gzugs ||
'jug yin gsum po de'i phyir ji lta bur ||
mi brtan pa de 'chi ba 'gyel zad la ||
phyogs pa'i mar me ljon shing chu yis bstan ||

64 本稿の注 no. 60 を参照。

らである⁶⁵。

「寿」は、熱と識の2つにとっての拠り所たる法であり⁶⁶、「生命」(*jivita) という〔語〕の同義異語である⁶⁷。

それ(寿)の力によって起こるとは、その寿なくして名も色も生じない、という意味である。

〔寿と名と色の〕3つは、それゆえ、いかに堅固でないかとは、それら寿と名と色の3つの喩えは、それゆえ、どういった類い〔の性質〕によって⁶⁸ 堅固でないか、すなわち消滅する性質を有し、すなわち、死去と倒壊と消尽に直面している点で〔堅固でないの〕である。その非堅固性が、死去に直面し、倒壊に直面し、消尽に直面しているところの灯火と樹と水〔の喩え〕でもって説かれている。

灯火〔の喩え〕によっては、名が死去に直面していることが示された。翌朝に灯火が風に靡く(吹き消される)ようにという〔句〕によって。

樹〔の喩え〕によっては、色が倒壊に直面していることが示された。水辺にある樹の根が揺れるようにという〔句〕によって。

水〔の喩え〕によっては、寿が消尽に直面していることが示された。壊れた器の中にある水が漏れるようにという〔句〕によって。

5.3.3.5 正法に対して努力しない諸原因に関する厭離の話

5.3.3.5.1 第1解釈 (VyY, D shi 132b4-7; P si 154a2-7)

さらに別〔の厭離の話〕では、8つの原因によって、この〔正〕法に対して努力しないであろう。

- (1) もし〔解脱できるとしても〕解脱を求めない者と、
- (2) 無病ではないゆえに、あるいは自由がない状態であるゆえに〔解脱を〕求めてもできない者と、

65 Cf. AKBh 9.10-12; AKBh (E) 13.19: rūpyate rūpyata iti bhikṣavas tasmād rūpōpādānaskandhaḥ. 『俱舍論』「界品」に引用される (AKUp 1014)。本庄 2014a: 87 によれば、出典は『雜阿』46 (T2, 11b21f.、梵文断片については Chung 2008: 63-64 参照)、パーリ平行経は SN 22.79.5 (= SN III 85 f.)。

66 本稿の注 no. 59 を参照。

67 本稿の注 no. 59 を参照。

68 rnam pa gang gis: 徳慧注の rnam pa gang gis (*yena prakāreṇa) は世親本論の韻文の語句 ji lta bur (*yathā) の換言。

(3) もし〔求めることが〕できるとしても、努力しないでも果報がある⁶⁹〔と考える〕者と、

(4) 他の者による〔行為を期待して〕、行為者は別である〔と考える〕者⁷⁰と、

(5) 努力しても確実に成就しないであろう者と、

(6) 「これ（正法）によって成就した」と信じない者と、

(7) 「わたしはどうやって努力すればよいのか」と手立てを知らない者と、

(8) 悪趣を超越したという安穩を得てしまった者⁷¹である。

さらに⁷²、

(1) 求める者、(2) 〔求めることが〕できる者、(3) 〔努力〕しなければ果報がない〔と考える〕者、(4) 〔自分〕以外には〔行為者と享受者は〕いない〔と考える〕者、

(5) 確実に成就する者、(6) 信じる者、

(7) 手立てを知る者、(8) 悪道という

極端に留まる〔という自覚ある〕者が、

求めることをしない〔ならば〕、

彼は確実に、悪業によって

覆われ、苦しみが深い、と説かれている⁷³。

69 brtsal (D) : btsal P) ba ma byas par yang (D) : om. P) 'bras bu yod pa ma yin pa : DP
ともに 'bras bu yod pa ma yin pa とあるも、この散文 (3) と真逆のものを述べる韻文
(3) には ma byas par || 'bras med po (〔努力〕しなければ果報がない〔と考える〕者)
とあるため、'bras bu yod pa ma yin pa から ma を抜き、'bras bu yod pa yin pa (努力し
ないでも果報がある〔と考える〕者) と訂正する。

70 (4) は自分がそれをしなくとも他人がしてくれるだろうと考える者、という意味である。
自業自得に反しており、誤った考え。

71 この (8) は好意的なものに見えるが、自分は既に人間としての生まれを得たため、
悪趣から超越したと安心してしまい、これ以上努力しない者のことである。

72 徳慧注によれば、以下の偈は、上に散文で示された (1)~(8) と性質が共通しないもの
(chos mi mthun pa)、すなわち逆の意味のものである。本稿の注 no. 74 を付した箇所
を参照。

73 以下にチベット訳テキストを提示しておく。

(1) don gnyer (2) nus dang (3) ma byas par ||
'bras med po (4) gzhan med pa dang ||

徳慧注 (VyYṭ, D si 297a2-3 ; P i 188a7-b1)

8つの原因によって、この〔正〕法に対して努力しないであろうと詳細に説かれたそれと性質が共通しないのは⁷⁴、

(1) 求める者、(2) 〔求めることが〕できる者、(3) 〔努力〕しなければと詳細に出ており、ないし、

彼は確実に、悪業によって
覆われ、苦しみが多い、と説かれている。

に至るまで説かれる。

5.3.3.5.2 第2解釈 (VyY, D shi 132b7-133a2 ; P si 154a7-b1)

⁷⁵(1) 悪趣〔の話〕を聞いて⁷⁶〔それを〕信頼〔するが〕、

↘ (5) nges ngar 'grub dang (6) yid ches dang ||
(7) thabs shes (8) log par ltung ba yi ||
mtha' la gnas pa'i skye bo gang ||
shin tu rtsol bar mi byed pa ||
de ni nges par sdig las kyis ||
bsgribs shing sdug bsngal mang bstan yin ||

74 徳慧によるこの注釈に基づき、本節末尾のふたつの偈は第2解釈の(1)~(8)とは正反対の、真逆の性質をもつ者を指すと理解した。

75 以下にチベット訳テキストを提示しておく。

(1) ngan song thos la yid ches shing ||
de yi gnyen por mi byed la ||
(2) 'jigs shing nus dang ldan pa dang ||
tshe thung de yang ma nges dang ||
(3) mi bya bar ni bya min dang ||
(4) byed po gzhan med (5) ma byas par ||
bde legs med cing (6) byas pa yang ||
mi 'jig (7) de byed mi shes min ||
(8) gal te so so'i skye bo dag ||
'dod pa yi ni zang zing gi |
phub ma la ni yongs 'jus nas ||
kye ma 'di ni rab myos pa'i ||
glang chen nyal ba byed dam ci ||

76 徳慧は「布教者たち (chos sgrogs pa mams) から〔聞いて〕」と補足する。

それ（悪趣）への対治を行わず、

(2) 恐れをなして、〔たとえ〕能力を有し〔ていても〕、

寿命が短く、さらにそれ（寿命）は不確定であり、

(3) 〔為すべきことを〕為すべきでないとして為さず、

(4) 〔自分〕以外の行為者はおらず、(5) 〔為すべきことを〕為さずして

安寧はなく、(6) 〔為すべきでないことを〕為しても〔業の果報が〕

壊れず、(7) その作用（手立て）を知らないのではない。

(8) もし異生たちが、

欲望〔の対象〕という原料（*āmiṣa）⁷⁷の粗穀⁷⁸を消化してしまつては、

ああ、これでは、酔って

眠った大象〔のような振る舞い〕⁷⁹をなしているのではないか⁸⁰。

77 *āmiṣa の語義については『釈軌論』第 1 章の「語義解釈」(1) で取り上げられている。上野 2010: (76) を参照。

78 徳慧は「欲望〔の対象〕という原料の粗穀と述べることによって、そこ（欲望の対象）に核心があることを否定するのである」という（本稿の注 no. 84 を付した箇所）。欲望の対象はあくまで「粗穀」であつて、その中に「粗」、すなわち核心（*sāra）・芯・実質はないということ。

79 酔って眠った大象〔のような振る舞い〕：詳細は不明であるが、「時間を無為に過ごす」あたりを意味する慣用句の一種か。

80 第 1 解釈と第 2 解釈を対比すれば以下のとおり。

第 1 解釈	第 2 解釈
(1) 解脱を求めない者	(1) 悪趣への対治を行わず
(2) 〔解脱を〕求めてもできない者	(2) 恐れをなし、〔たとえ〕能力を有し〔ていても〕、寿命が短く、不確定であり
(3) 努力せずに果報があると考える者	(3) 〔為すべきことを〕為すべきでないとして為さず
(4) 行為者は別であると考える者	(4) 〔自分〕以外の行為者はおらず
(5) 努力しても確実に成就しない者	(5) 〔為すべきことを〕為さずして安寧はなく
(6) 信じない者	(6) 〔為すべきでないことを〕為しても〔業の果報が〕壊れず
(7) 手立てを知らない者	(7) かの者は〔何をどのように〕為す〔べきか、その手だて〕を知らないのではない

徳慧注 (VyYṭ, D si 297a3-297b2 ; P i 188b1-189a2)

さらに別の厭離させる〔話〕が、悪趣〔の話〕を聞いて〔それを〕信頼〔するが〕と詳細に出ている。

(1) 悪趣〔の話〕を聞いてとは、布教者たち (chos sgrogs pa rnams)⁸¹ から、である。

信頼とは、「悪趣は存在する。不善業によってそこ（悪趣）に生まれる」と考えて、である。

それへの対治を行わず、それに対する対治、すなわち、悪趣に生まれることを妨げ、善趣を獲得させるところの善業を行わず、である。

(2) 恐れとは、諸悪趣に対する〔恐れ〕である。

能力を有しとは、善を実践することに対する〔能力を有し〕である。

寿命が短くとは、いかほどであっても寿命は百年である。

さらにそれは不確定とは、さらにその寿命は不確定であり、ある者は母胎の中で死ぬ。ある者は幼年に〔死ぬ〕。ある者は壮年に〔死ぬ〕⁸²。

(3) 〔為すべきことを〕為すべきでないとして為さず〔とは〕、善を不善として為さず、という意味である。

(4) 〔自分〕以外の行為者はおらず〔とは〕、それ（業）について別の行為者はいない〔という意味である〕。

(5) 〔為すべきことを〕為さずして安寧はなく〔とは〕、善を為さずして苦がなくなることはない〔という意味である〕。

(6) 〔為すべきでないことを〕為しても〔業の果報が〕壊れず〔とは〕、蓄積さ

(8) 悪趣を超越したという安穩を得てしまった者

(8) 欲望〔の対象〕という原料の糲殻を消化してしまっは酔って眠った大象〔のような振る舞い〕をなしているではないか

81 『釈軌論』第5章冒頭では、『釈軌論』を学修すべき対象者として言及される「説法者」には chos smra ba po とのチベット訳語が与えられているため、当該箇所 chos sgrogs pa は必ずしも佛教の説法者を意味しないものと考え、「布教者」の訳語を充てた。

82 Cf. Uv 1.9 :

garbha eke vinaśyante tathaike sūtikākule |
parisṛptās tathā hy eke tathaike paridhāvinaḥ ||

れた善〔業〕と不善業はまた、果報が成熟しないと消えない〔という意味である〕。

(7) その作用（手立て）を知らないのではない〔とは〕、自分はどのように善をなすべきかということと、何によって悪趣に趣かず善趣を得るべきかという手立てを知らないわけではないにもかかわらず、である⁸³。

(8) もし異生たちがと詳細に出ているのは、欲望〔の対象〕自体が原料の粗穀であるから（KDh.）、欲望〔の対象〕という原料の粗穀と述べることによって、そこ（欲望の対象）に核心があることを否定するのである⁸⁴。

これ（欲望の対象）は上述されたとおりであるので、この異生が欲望〔の対象〕という原料の粗穀を消化してしまつては、ああ、酔って眠った大象〔のような振る舞い〕をなしているのではないか、と説かれている。

異生とは、およそ真実を見た者たちとは別個の（*prthak）、すなわち外部となった（／外部である）ひと（*jana）が異生と呼ばれる⁸⁵。

ああ、これではとは、それ（異生）に対する憐みを示している。

酔って眠った大象とは、酔った状態にあり、眠っている大象〔という KDh.〕であるから、その「酔って眠った大象」である。

83 当該箇所は難解であるため、テキストを提示しておく。(7) *de byed mi shes min | bdag gis (gis D : gi P) ji ltar dge ba bya (bya D : bya ba P) snyam pa dang | gang gis na ngan song du mi 'gro zhing bde 'gro thob par bya snyam du thabs mi shes pa la yang ma yin bzhin du'o ||*

84 本稿の注 no. 78 にて言及したように、欲望の対象はあくまで「粗穀」であつて、その中に「粗」、すなわち核心（*sāra）・芯・実質はないということ。

85 徳慧注が挙げる「異生」の語源解釈に一致する用例を他文献に見出し得なかった。『俱舍論』『根品』に引用される経には次のようにある。AKBh 42.23-24 : *yasyemāni pañcendriyāni sarveṇa sarvaṃ na santi, tam ahaṃ bāhyaṃ pṛthagjanapakṣāvasthitaṃ vadāmi*. 「だれかにこの五根が全くそなわっていないならば、私はかれを、外部の者、凡夫の側にある者と呼ぶ。」（本庄 2014a : 160 より訳文を抜粋。AKUp 2010 に相当。櫻部 1969 : 251-252 参照。）そこでの「五根」は信、精進、念、定、慧の五つをいう。

5.3.3.6 5つの過失を有する誤った行為に関する厭離の話

5.3.3.6.1 本論：5つの過失を有する誤った行為

(VyY, D shi 133a2-133b3 ; P si 154b1-155a6)

[A] あらゆる愚者に〔対治の〕⁸⁶ 扱い所があるけれども、

(1) ああ (*aho)、ひどいものであり、(2) ああ、難しく、

(3) ああ、苦痛であり、(4) ああ、恐怖であり、

(5) ああ、逸失に直面している⁸⁷。

[B] およそ佛説と呼ばれるものは、

宝であり、望まれた目的(涅槃／解脱)を成就させる〔のであり〕、

惜しみなさに留まるひと(佛陀)が⁸⁸、警鐘(ガンディ)を鳴らし⁸⁹、警告しても(それを説いても)⁹⁰、

[C] 愚癡と慢心を〔そなえた〕盲人〔である〕

これらの愚者たちは、己自身が

敵である如く、逸失の原因である、

86 rten yod kyang : 徳慧注 (gnyen po srid pa yod kyang) に基づき「〔対治の〕」と補う。

87 以下に [A] のチベット訳テキストを提示しておく。

byis pa kun ni rten yod kyang ||

(1) kye ma mi bzad (2) kye ma dka' ||

(3) kye ma'o sdug bsngal (4) kye ma'o 'jigs ||

(5) kye ma'o brlag la phyogs pa yin ||

88 skye bo ser sna med 'dug pas|| : 佛陀は惜しみなく法を説いたために人々はそれを努力なくして聴くことができるものの、努力なくしてはそれを成就しえない、という意味であらう。

89 gaṇ ḍī brdungs : Negi s.v. gaṇḍīdānam, gaṇḍī ākoṭikā. gaṇ ḍī brdung ba, Negi s.v. gaṇḍīdānam, gaṇḍyākiṭanam. Cf. BHSD s.v. gaṇḍī.

90 続く [C] と一連の詩頌であるが、ひとまず [B] のチベット訳テキストを提示しておく。

sangs rgyas gsung zhes bya ba gang ||

dkon mchog 'dod don sgrub mdzad pa ||

skye bo ser sna med 'dug pas ||

gaṇ ḍī brdungs te sgrogs byed na ||

家の声を喜んでいる⁹¹。⁹²

[D] 自らを利することに努める者たちは、〔それがたとえ〕敵であっても、善く説かれた〔教え〕を掴み、

悪い（劣った）ものであっても、人々に資し、人々を満足させる〔教え〕⁹³を考察するのであれば、

生物（趣／世間）の利益の終着点であり、益する者であるところの⁹⁴

阿羅漢御自身がお説きになられた

教えをもし掌握しないのであれば、嘆きのことは⁹⁵をここで発せよ⁹⁶。

91 grong ba'i sgra (sgra] VyYT (DP) : dgra VyY (DP)) la mngon par dga' || : 徳慧注にある bag med pa'i rgyu 'khrig pa dang ldan pa'i sgra dag がこれに対応するため、VyYT (DP) sgra を採用する。VyY (DP) dgra は前の語に引きづられたのであろう。また、家の声 = 逸失の原因であり、この「家の声」は先の「警鐘を鳴らす」 (= 鐘の音) との対比であらう。

92 以下に [D] のチベット訳テキストを提示しておく。

gti mug nga rgyal ldongs pa yi ||
byis pa 'di dag bdag nyid la ||
dgra bo bzhin du brlag pa'i rgyu ||
grong ba'i sgra la mngon par dga' ||

93 skye bo'i ngor ni (ngor ni D] : nga ro P) : janānurodha の訳例が幾つかの文献にあるため、D を採用する。

94 'gro ba phan pa dpung gnyen : Rāhulastava に jagaddhitaparāyaṇaḥ の用例があるため (Schlingloff 1955 : 89-92)、それを原語として想定した。

(sattvasāra namas tubhyaṃ viśuddhātulabuddhaye |
yas tvam sarvāsv avasthāsu) jagaddhitaparāyaṇaḥ ||

また、それによって phan pa を形容詞ではなく「益する者」と名詞で理解した。Negi にも phan pa のみで upakāraḥ などの名詞の用例が採録されている。

95 「嘆きのことは」(hud tshig) は韻文 [A]、特に「ああ」(*aho) にはじまる5句を指すであらう。

96 難解である。ただ、前半と後半は対比とみられる。自利に努力する者たちは敵や悪しきものであっても自己を裨益する教えなどを掴むのであるから、阿羅漢 = 佛陀が説いた教えを理解しないのは嘆かわしいという趣旨であらう。

97 以下に [D] のチベット訳テキストを提示しておく。

bdag la phan par brtson rnams kyis ni dgra yin na yang legs bshad gzung ||
ngan pa yin kyang skye bos phan 'dogs skye bo'i ngor ni dpyad bya na ||
dgra bcom pa nyid 'gro ba phan pa dpung gnyen phan pa gsung ba yi ||

これらの諸偈によっては、いかにして愚者たちを憂うべきか、それが示された。

〔それでは、〕 どうして愚者たちを憂うべきなのか。〔なぜなら、愚者たちは〕 5つの過失を有する誤った行為に留まるからである。

また、その誤った行為が、別の3偈（〔B〕〔C〕〔D〕）によって説かれている。さらにそれ（誤った行為）は、要するに、佛説を聴かないことと記憶しないこと⁹⁸ に関する事と知るべきである。

およそ得難く、意義が大きく、〔それでいて〕 努力なくして得られるであろう佛説であるにもかかわらず、〔愚者は〕 愚癡によって〔眼を覆われ〕 盲目である点で、放逸の原因である性交に関する諸語に貪著して、〔佛説を〕 聴きたいと思わず（=〔B〕〔C〕）、聞いたとしても〔他者の〕 利益を意図し（phan pa bzhed pa）、利益する者の最上者〔である世尊〕がお説きになられたことを実践しない点で、〔佛説を〕 記憶しない（=〔D〕）。

5つの過失とは何か。(1) ひどいものであること、(2) 難しいこと、(3) 苦痛であること、(4) 恐怖すること、(5) 逸失に直面していることである。

対治がありえるけれども、その中に5つの過失があるところの誤った行為も、「ひどいもの」などの語によって説かれている。

(1) いかにもひどいもの〔であること〕は、それが後の煩悶の原因だからである。なぜなら、それによって煩悶することになるところのそれ（誤った行為）を為して、「ひどいものであった」と言われる。

(2) 難しい〔こと〕は、多くのことに尽力する点で、疲労の原因だからである。

(3) 苦痛である〔こと〕は、身と心を害する原因だからである。殺害、拘束、殴打など他者〔による〕 危害（身）と憂い（心）の拠り所である点で。

(4) 恐怖である〔こと〕は、悪趣に趣く原因だからである。

(5) 逸失に直面していることは、涅槃〔へ〕の道を遠ざかる原因だからである⁹⁹。

↘ gsung ni gal te mi 'dzin [pa na] kyi hud tshig ni 'dir byas legs ||

なお、d 句のみ13音節であり（他は15音節）、2音節が足りない。この詩脚のうち、徳慧注に引用（言及）されているのは kyi hud tshig, 'dir byas legs のみであるため、その回収も見込めない。そのため mi 'dzin の後に [pa na] の2音節分を任意に補う。

98 世親による以下の説明によれば、「記憶しないこと」とは教えを聴いてもそれを実践しないことを指す。

99 世親による説明を総合すれば、韻文〔B〕〔C〕〔D〕は〔A〕の詳説（nirdeśa）であ

徳慧注 (VyT, D si 297b2-298a6 ; P i 189a2-190a3)

さらに、別の類い〔の話〕によって厭離させることが、

あらゆる愚者に〔対治の〕拠り所があるけれども

と詳細に出ている。

あらゆる愚者に〔対治の〕拠り所があるけれどもとは、異生たちに〔対治の〕拠り所があるけれども、という意味である。

ここで発せよとは、嘆きのことばを、である。

これらの諸偈によってとは、

(1) ああ、ひどいものであり、(2) ああ、難しく、

云々の諸〔偈〕によって。

5つの過失があるところの誤った行為とは、その誤った行為には2種ある。〔一方は〕佛説を聴かないことを特徴とすると解説されている。また、その誤った行為が、別の3偈によって説かれていると詳細に出ているものによって。

別の3偈によって説かれているとは、

およそ佛説と呼ばれるものは、

と詳細に出ている、これらの3つの偈（〔B〕〔C〕〔D〕）によって。

り、〔B〕〔C〕は佛説を聴かないことを、〔D〕は佛説を記憶しないこと（聴いても実践しないこと）を説く。ただし、徳慧注をみても、〔A〕の「(1) ひどいものであること」以下の5つの過失と、「佛説を聴かないこと／記憶しないこと」との配当関係は述べられていない。したがって、5つの過失それぞれに「佛説を聴かないこと」「佛説を記憶しないこと」の両項が配当されるということであろう。以下では、5つの過失がそれぞれ何の原因・拠り所であるのかを図示するに留める。

〔A〕に示される5つの過失	それが何の原因・拠り所であるか
(1) いかにもひどいものであること	後の煩悶の原因
(2) 難しいこと	疲労の原因
(3) 苦痛であること	他者による危害（身）と憂い（心）の拠り所
(4) 恐怖であること	悪趣に趣く原因
(5) 逸失に直面していること	涅槃への道を遠ざかる原因

さらにそれ（誤った行為）は、要するに、佛説を聴かないことと記憶しないことに関するると知るべきである。まず、〔佛説を〕聴かないことに関するると知るべきであるのが、およそ佛説と詳細に出ている。そのとおりに佛説を聴かないという誤った行為が、

〔およそ〕佛説と呼ばれるもの

ないし、

逸失の原因である、
家の声を喜んでい

という〔句〕に至るまでの2偈（〔B〕〔C〕）によって説かれている。

そ〔の2偈〕の中で、およそ得難く、〔意義が大きく、それでいて努力なくして得られるであろう〕佛説云々の諸語は、およそ佛説と呼ばれるものは云々の諸語と、適宜、結びつけるべきである¹⁰⁰。

記憶しないことに関するると知るべきであるのは、聞いたとしても〔自己の〕利益を意図しと詳細に出ている。そのように記憶に関する誤った行為が、

自らを利することに努める者たちは、〔それがたとえ〕敵であっても

というこの偈によって説かれている。

100「佛説を聴かないこと」に関する誤った行為の対応関係は以下のとおり。

韻文	散文
宝である	得難く
望まれた目的（涅槃／解脱）を成就させる	意義が大きく
人々を惜しみなく留まらせる	努力なくして得られるであろう
愚癡と慢心を〔そなえた〕盲人〔である〕これらの患者たちは	愚癡によって〔眼を覆われ〕盲目であることにより
己自身が敵である如く	放逸の原因である性交に関する諸語に貪著して
逸失の原因である家の声を喜んでい	〔佛説を〕聴きたいと思わず

これについても、語句に、あるいは意味に、適宜、結びつけるべきである¹⁰¹。

そ〔の中に5つの過失があるところの誤った行為〕も、「ひどいもの」などの語によって説かれているとは、その誤った行為が、「ひどいもの」や「難しい」などの語によって説かれている。どのようにしてか。彼らによる、その誤った行為を見て、

- (1) ああ、ひどいものであり、(2) ああ、難しく、
(3) ああ、苦痛であり、(4) ああ、恐怖であり、

云々と語られている。

〔(3) 苦痛であることは、身と心を〕害する原因だからである。すなわち、身を害する原因だからであり、心を害する原因だからである。

どのようにか。殺害、拘束、殴打など他者〔による〕危害と憂いの拠り所である点で、である。殺害、拘束、殴打など〔それ〕自体が他者〔による〕危害であるから、「殺害、拘束、殴打など他者〔による〕危害」〔という KDh.〕である。

などという語には、諍いなどが含まれる。

その、殺害、拘束、殴打などの他者〔による〕危害の拠り所 (gnas) である点で、〔つまり〕根拠 (rten) である点で、である。

以上のとおりであれば、まずは苦痛が身を害する原因だからである。

〔苦痛は〕心を害する原因でもある。憂いの拠り所である点でとは、不快さの根

101 「佛説を記憶しないこと」に関する誤った行為の対応関係は以下のとおり。

韻文	散文
自らを利することに努める者たちは敵であっても善く説かれた〔教え〕を掴み	〔佛説を〕聞いたとしても
悪い (劣った) ものであっても人々に資し人々を満足させる〔教え〕を考察するのであれば	〔自己の〕利益を意図し
生物の利益の終着点であり益する者であるところの阿羅漢御自身がお説きになられた語 (教え)	利益する者の最上者〔である世尊〕がお説きになられたこと
掌握しない	実践しない

拠である点で、という意味である。

5.3.3.6.2 余論：韻文 [A] に出る *aho* の語義解釈

(VyY, D si 133b3-5 ; P i 155a4-6)

aho というこの不変化詞は、(1)「驚嘆」の意味も見られる。例えば「ヴァツチャ〔Vatsa 姓〕の息子は、浄らかな信を起こして、おお (*aho*)、佛よ、おお、法は善く説かれた」¹⁰²と語られているように。

(2)「慨嘆(憂い)」の意味でも、「大地の精髓が消失するや否や、『ああ (*aho*)、大地の精髓が、ああ、大地の精髓が』と憂い、」¹⁰³〔と語られている〕ように。

(3)「懇願」の意味でも、「母よ、どうか (*aho*)、私を、人間という幸福を有する者たちの〔衆〕同分に生んで下さい」¹⁰⁴と〔語られている〕ように。

(4)「憤慨」の意味でも、例えば「泥棒に入られたら、ふん (*aho*)、婆羅門に幸

102 『出家事』に類似表現が見られる。Pravr-v IV 33.33-34: *sa smitapūrvaṃgamo bhagavati labdhaprasāda udānam udānayam. aho buddha, aho dharma, aho saṃgha. aho dharmasya svākyātātā.* (なお *udānayam* について、Vogel and Wille 1996: 156 は、正規形は *udānāyati* であるが、Use of first for singular verb form と説明する。)

その他の用例は SWTF Band IV s.v. *aho* を参照。

103 出典は『中阿』154「婆羅婆堂經」である。T1, 674c24-26: 地味滅已、彼衆生等便共聚集、極悲啼泣而作是語:「奈何地味、奈何地味」。

パーリ平行経は *Vāseṭṭha* が対告衆の DN 27, *Aggaññasutta* である。DN III 86.21-23: *rasāya paṭhaviyā antarhitāya sannipatiṃsu sannipatitvā anutthuniṃsu aho rasaṃ aho rasan ti.*

『破僧事』に平行箇所がある。SBhV I 9.8-9: *antarhite pṛthivīrase te satvāḥ saṃgamyā samāgamyā śocanti klāmyanti paridevante | evaṃ cāhur aho rasa aho rasa iti.*

『ウパーイカー』にも平行箇所がある。AKUp, D ju 193a6-7, P tu 221a1-2: *sa'i ro (D); P zhag) de nub pa dang sems can de dag 'dus shing tshogs nas 'di skad du kyi hud ro kyi hud ro zhes nyam thag pa'i smre sngags 'don to ||(D); P te|* (AKUp 3104, 本庄 2014a: 479)

徳慧注が補足的に引用する用例は SBhV I 9.8-9 とほぼ同文である。

104 出典不詳。なお、『俱舍論疏明瞭義』「業品」に類似した表現が見られる。AKVy 390.7-9: *tasya caivaṃ bhavati. aho batāhaṃ devasubhagānāṃ manuṣyasubhagānāṃ vā sabhāgatāyāṃ upapadyeyeti. yāvat sa tatra upapadyata iti.* 「……「そしてその者に次のような考えが起る。『ああ実に私は、天の幸福を有する者或は人の幸福を有する者の〔衆〕同分に生まれたいものである』と。乃至、彼はそこに生まれる」と〔説かれてある〕」(舟橋 1987: 250 より訳文を抜粋)

あれ^{105]}¹⁰⁶云々と〔語られている〕ように。

それ (*aho* という語) は、ここでは慨嘆 (憂い) の意味でみなすべきである。

徳慧注 (VyYṭ, D si 298a6 ; P i 190a2-3)

(2) 「慨嘆 (憂い)」〔の意味で〕は、「ヴァーシシュタの息子よ、大地の精髓が消失するや否や、彼ら人々は集結し、会合して、『ああ、大地の精髓が』と憂い、疲労困憊し、落ち込んだ」と出ている。

5.3.3.7 八無暇に関する厭離の話 (VyY, D shi 133b5-7 ; P si 155a6-8)

ある盗人が、城壁に8つの穴をあけ、王の倉庫に侵入し〔たにもかかわらず〕、喉が乾いたので甘美な (よい香りのする) 酒を飲み、酔っぱらって居眠りし、明朝に捕縛されて苦しんだ、という〔話〕が知られている。

同様に、あなた方は「無暇」(*akṣaṇa) という城壁に8つの穴をあけ、「〔佛説を聴き得る〕有暇の発生」(*kṣaṇopapatti) という王の倉庫に侵入し〔たにもかかわらず〕、「欲楽を享樂する」という酒を飲み、酩酊した状態で、「寿命」という夜から朝にかけ自身に苦しみを生じさせる、というのは適切でない。

徳慧注 (VyYṭ, D si 298a6-299 b 5 ; P i 190a3-192a2)

同様に、あなた方は「無暇」という城壁に8つの穴をあけという中で、8つの無暇はどれか¹⁰⁷。

比丘たちよ、これら8つは、人が梵行に留まるための、無暇と非時である。どの8つか。

〔(1) 比丘たちよ、教主である如来・阿羅漢・正等覺・明行足・善逝・世間

105 bram ze'i legs pa yin no : *brāhmanasātkr. 「もってけ泥棒」ほどの意味であろうか。

106 出典不詳。

107 以下に引用される経典は、『中阿』124「八難経」、『佛説八無暇有暇経』(T 17, No.756, 義浄訳) その他に平行する (平行資料については Chung and Fukita 2011 : 116 を参照)。そして、松田和信が再発見したチベット・ボカン寺旧蔵の『三啓集』(*Tri-daṇḍamālā*) 梵文写本に第29三啓経としてその全体が含まれている。『三啓集』については松田 2019 ; 2020a を、『三啓集』から回収される第29三啓経の梵文については上野 2020 を参照。その梵文は徳慧注のチベット訳と概ね一致する。

解・無上調御丈夫・天人師・佛世尊¹⁰⁸がこの世に生まれ、善逝によって知らしめられたところの、寂靜に導き、完全なる涅槃(般涅槃)に導き、完成された菩提に導く法が示されたとき¹⁰⁹、かの有情は、地獄どもの中に生まれる。これは、人が梵行に留まるための、第1の無暇と非時である。

(2) 同様に、畜生どもの中に〔生まれる〕。これが第2であって、先と同様である。

(3) 同様に、餓鬼どもの中に〔生まれる〕。これが第3であって、先と同様である。

(4) 「また次に」と〔経に〕詳細に出ており、ないし

かの有情は、寿命が長い神々(長寿天)の中に生まれる

に至るまで〔出ている〕。これが第4である。

(5) 「また次に」、ないし「善逝によって知らしめられたところの〔法〕が示されたとき」に至るまでと、

かの有情は、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷からなる四衆が現れていない辺境にて、辺境民たちの中に生まれる。

これが第5の無暇であって、先と同様である。

(6) 「また次に」と〔経に〕詳細に出ており、ないし「善逝によって知らしめられたところの〔法〕が示されたとき」に至るまでと、

また、かの有情は、内地に生まれるが、かの者は愚鈍であり、聾啞であり、

108 いわゆる「如来十号」と通称される佛陀の称号について、ここでは徳慧注チベット訳テキストにおけるツェクに基づき、各称号を区分した。すなわち、無上士(anuttara)と調御丈夫(puruṣadamyasārathi)とを区別せず「無上調御丈夫」という一号とし、また、佛(buddha)と世尊(bhagavat)とを区別せず「佛世尊」という一号とみなす見方である。これは『釈軌論』第2章の冒頭における世親による説明区分と概ね一致する(堀内2016:1-6を参照)。第2章冒頭は「如来」に先立ち「世尊」が最初に言及される十号形式の經典に対する語義注釈である。

109 法に対する一種の定型句である。Cf. Dbsū(2)9: dharmāś ca deśyate aupaśamikaḥ pārīnirvāṇikaḥ sambodhagāmī sugatapraveditaḥ。パーリ文献における用例については PED s.v. opasamika を参照。

手話を用い（口をきくことができず）、善く説かれた、または、悪しく語られた諸の教えの意味を理解することができない¹¹⁰。

先と同様に、〔これが〕第6の無暇と非時である。

(7) 「また次に」と〔経に〕詳細に出ており、ないし「善逝によって知らしめられたところの〔法〕が示されたとき」に至るまでと、

また、かの有情は、内地に生まれ、愚鈍でなく、聾啞でなく、手話を用いることなく（口をきくことができ）、善く説かれた、または、悪しく語られた諸の教えの意味を理解することはできるが、かの者は邪見を有し、顛倒した見を有する者であるから、以下のような見解をもつ者、以下のようにいう者となる。すなわち、「施与はない。供養はない。献供はない。善行はない。悪行はない。善行と悪行の諸業の果報が成熟することはない。現世はない。来世はない。父はない。母はない。化生の有情はない。世界に阿羅漢はない¹¹¹。正趣者はない。正行者はない。現世と来世を自ら現知によって現証し達成して「我が生は尽きた。梵行は住し終えられた。為すべきことは為し終えられた。今〔生〕とは別の有を〔わたしは〕知らない」と〔世間に〕知らしめるような（＝世間に知られている）者はいない」と。これは、人が梵行に留まるための、第7の無暇と非時である。

(8) また次に、かの有情は、内地に生まれ、また、かの者は愚鈍でなく、聾啞でなく、手話を用いることなく（口をきくことができ）、善く説かれた、または、悪しく語られた諸の教えの意味を理解することができ、かの者は正見を有し、ないし、「為すべきことは為し終えられた。今〔生〕とは別の有を〔わたしは〕知らない」と〔世間に〕知らしめるに至るまでなのであるが、教主である如来・阿羅漢・正等覺・明行足・善逝・世間解・無上調御丈夫・天人師・佛世尊が〔この〕世に生まれにておらず、善逝によって知らしめられたところの、寂靜に導き、完全なる涅槃（般涅槃）に導き、完成され

110 Cf. ŚrBh II 28.11-12: jaḍa eḍamūko hastasaṃvācikaḥ. apratibalaḥ subhāṣitadurbhāṣitānāṃ dharmānāṃ artham ajñātum.

111 邪見の定型句である（AKBh 247.20, AKUp 4088, AKVy 409.19-23）。

た菩提に導く法が説かれていない。これは、人が梵行に留まるための、第8の無暇と非時である。

(9) 比丘たちよ、人が梵行に留まるための、かの、ただひとつの有暇と、[ただ]ひとつの有時がある。

比丘たちよ、人が梵行に留まるための、かの、ひとつの有暇と、ひとつの有時とはどれか。比丘たちよ、教主である如来・阿羅漢・正等覺・明行足・善逝・世間解・無上調御丈夫・天人師・佛世尊がこの世に生まれ、善逝によって知らしめられたところの、寂靜に導き、完全なる涅槃(般涅槃)に導き、完成された菩提に導く法が示されたとき、また、かの有情は内地に生まれ、かの者は愚鈍でなく、聾啞でなく、手話を用いることなく(口をきくことができ)、善く説かれた、または、悪しく語られた諸の教えの意味を理解することもでき、かの者は正見を有し、顛倒のない見を有する者であるから、以下のような見解をもつ者、以下のようにいう者となる。すなわち、「施与はある。供養はある。献供はある。善行はある。悪行はある。善行と悪行の双方の果報が成熟することはある。現世はある。来世はある。父はいる。母はいる。化生の有情はいる。世界には、阿羅漢と、正趣者と、正行者と¹¹²、現世と来世を自ら現知によって現証し達成して、「我が生は尽きた。梵行は住し終えられた。為すべきことは為し終えられた。今〔生〕とは別の有を〔わたしは〕知らない」と〔世間に〕知らしめるような者はいる」と語る¹¹³。これは、比丘たちよ、人が梵行に留まるための、ひとつの有暇であり、ひとつの有時である¹¹⁴。

112 'jig rten na dgra bcom pa dang | yang dag par song ba dang | yang dag par zhugs pa dang | : チベット訳テキストではこのとおり... dang |とあり、阿羅漢、正趣者、正行者の3項が並列関係にある(同じく(7)に否定形で出る場合も同様である)。しかし SBhV II 220-221によれば、後二者は「阿羅漢」を修飾する形容詞であり (arhantah samyagatāḥ samyakpratipannāḥ)、「正しく趣き、正しく行じている阿羅漢」とある。そしてこの語が「～と〔世間に〕知らしめるような者はいる」以下の文の主語となっている。

113 正見の定型句である。例えば ArthavSū 35.4-8を参照。

114 『三啓集』に第29番目の三啓経として含まれるサンスクリット文、および『中阿含経』第124「八難経」をはじめ各種漢訳ではこの箇所以降に韻文が続くも、徳慧注には引用されない。したがって、徳慧が引用するのは散文のほぼ全体ということになる。

5.3.3.8 カポータ・マーリニーに因んだ厭離の話

(VyY, D shi 133b7; P si 155a8-b2)

また、カポータ・マーリニーという母猪 (phag mo¹¹⁵) の前〔世〕の振る舞い¹¹⁶〔という話〕も語るべきである。すなわち、〔彼女と〕同様に、正法を聴かないことにより、有情たちは上位 (*abhyudaya¹¹⁷) に往生して、〔業の〕力 (*āvedha) が尽きて、あたかも〔上方に〕放たれた矢が再び地面に落ちるように¹¹⁸、またもや悪趣に趣くことになる。

徳慧注 (VyYṬ, D si 299b5-300a6; P i 192a2-192b6)

また、カポータ・マーリニーという母猪の前〔世〕の振る舞い〔という話〕も語るべきである。同様に、正法を聴かないことによつてと詳細に出ているのはどのような〔話〕か¹¹⁹。

「王舎城に由縁あり。〔あるとき〕世尊は、沢山の子 (phru gu) に授乳している母猪をご覧になっていた¹²⁰。ご覧になった後、〔世尊は〕微笑まれた。尊者アーナンダは、世尊が微笑まれたのを見た。見てから、世尊に次のように話しかけた。「如来、阿羅漢、正等覚者たちは、因なくして、縁なくして、微笑まれることはありません。世尊が微笑まれた因は何でしょうか。縁は何でしょうか」

115 phag mo: あるいは「豚」か。

116 phag mo thi ba'i phreng ldan ma'i ngon gyi tshul: 徳慧注に de la bu mo thi ba'i phreng ldan ma zhes bya ba zhiḡ yod de | との表現があることから、thi ba'i phreng ldan ma を固有名詞 (*kapotamālinī) として読んだ。ただし、平行する漢訳『雑譬喻經』にはそれに相当する表記が見当たらない。当該の人物は、『俱舍論』『世間品』では四生のうち「湿生」の代表格として言及され (AKBh 119.7)、それに対する諸注釈では「ブラフマダッタ王の胸に腫れ物ができ、それが次第に大きくなり、生まれた童女」がカポータ・マーリニーであるという (AKVy 264.24-25, 山口・舟橋 1955: 68)。『俱舍論』のチベット訳は thi ba'i phreng ba, 漢訳は「迦富多摩梨尼夫人」(真諦) および「鴿鬘」(玄奘)。

117 天や人に生まれ変わること。

118 この喩えは『俱舍論』『根品』においても同様の趣意で用いられている (AKBh 77.22; 櫻部 1969: 330)。

119 徳慧注において以下に引用される話は、漢訳『雑譬喻經』(No.207, 道略集)の第15話と平行する。また、話の中に挿入された韻文は Śarīrāthagāthā 8 に相当し、数多の經に引用されるものである。

120 Cf. 『雑譬喻經』T4, 525c10-12.

[と]¹²¹。

世尊が仰った。「アーナンダよ、[かつてわたしは、]以前の生涯において、マヘンドラセーナという王¹²²であった。彼にはカポータ・マーリニーという娘がいた。その娘が父に、偈を、

何によって、[来世への] 趣きは退けられるのでしょうか。

どこで、[生死の] 道は退けられるのでしょうか。

どこで、世間における楽と

苦は残りなく滅するのでしょうか¹²³。

とこう語ると、それから父は婆羅門たちを集めて、「これ(偈の意味)はどういうことでしょうか」と尋ねたが、彼ら(婆羅門たち)は[その偈の]意味がわからず、議論を始め、「大王よ、何でもありません(*akiñcana)、何でもありません」と述べた。すると、その娘は、その沢山のひとたちのその言葉(「何でもありません」!)を聞いて、かつて[前世において]その(無所有処の)等至の集積を正しく実践していたため、順序どおり、無所有処の等至に入った。その原因によって、[死後に]無所有処(*akiñcanya)に生まれた¹²⁴。

121 Cf. 『雑譬喩経』 T4, 525c13-21.

122 rgyal po dbang chen sde zhes bya ba zhig : *mahendraseno nāma rājā. 当該の前世との関連は不明であるが、『破僧事』に同名の人物に関する因縁譚がある(SBhV II 96-101)。

123 Śārīrāthagāthā に相当する。Śag 8.1 :

kutaḥ sarā nivarttante kutra vartma na varttate |
kutra duḥkhasukhaṃ loka niḥśeṣam uparudhyate| (|1)

平行文献は多い(Enomoto 1989:26を参照)。漢訳阿含では『雑阿』601, T2, 160c19-22; 『雑阿』1329, T2, 366c16-18に平行する。後者の用例についてはEnomoto 1994:65をも参照。

124 翻訳文中に示した想定原語からも明らかであるように、婆羅門たちは韻文の意味が分からず*akiñcanaと言ったがため、カポータ・マーリニーはそれこそが韻文の意味であると考え、akiñcanya、つまり無所有処定に入ってしまった、という点が話の核心である。なお、漢訳対応経の趣意は次のとおり。一人の婆羅門が、韻文の意味を教える報酬の珍宝を欲していたため、「私が答えよう」と言った。その女性(カポータ・マーリニー)はそれを聞いて韻文を誦んじ、その意味を問うた。その婆羅門もその意味が分からず、「これは何でもありません(無所有)」と述べた。女性は次のように考え、無所有処定に入った。彼女は「この婆羅門の先生は真実の師であって、私を利するところが

それから〔娘は無所有処で〕命終し、特殊な順後受（*aparaparyāvedaniya、来々世以降に果報を享ける）の業によって、今現在、母猪となったのである¹²⁵。もし、その娘が、この偈に対して、

眼と耳、同じく鼻、
舌と身、同じく意、
名と色が
残りなく滅するところ（滅するから）、
それによって（そこにおいて）〔来世への〕趣きは退けられる¹²⁶。

と詳細に出ている答えを得たならば、そ〔の娘〕はそうした境遇にはならなかったであろう〕〔と〕¹²⁷。

同様に、正法を聴かずに有情たちが上位に往生して、〔業の〕力が尽きとは、〔業の〕引力（*ākṣepa¹²⁸）が尽き、という意味である。あたかも〔上方に〕放たれた矢が再び地面に落ちるように、またもや悪趣に趣くことになる。

問いの偈である

「少なくない」と考えた。彼女は命終後、無所有処に生まれた、云々ということである。この女性が韻文の意味を聴き損ねたにも関わらず婆羅門に感謝しているところに哀愁や愛嬌を感じるが、いずれにせよ、この寓話の含意するところは、佛教の韻文の意味に対する誤った解釈を聴いてしまったがために、その女性が不運となってしまった。それを教訓として、佛説をしっかりと聴くべしということである。

125 Cf. 『雑譬喻経』 T 4, 525c22-526a10.

126 先に引用された「問いの偈」に対する「答えの偈」である。Śarīrārthagāthā 8.2-3 に相当する。

caḥṣuḥ śrotraṃ tathā ghrāṇaṃ jihvā kāyo manas tathā |
yatra nāma ca rūpaṃ ca niḥśeṣaṃ uparudhyate| (|2)
tataḥ sarā nivarttante tatra vartma na varttate |
tatra duḥkhasukhaṃ loke niḥśeṣaṃ uparudhyate (|3)

その他、『雑阿含経』にも平行する韻文がある。『雑阿』 601, T2, 160c23-26; 『雑阿』 595, T2, 159b26-27; 『雑阿』 1187, T2, 321c13-15; 『雑阿』 1329, T2, 366c20-23.

127 Cf. 『雑譬喻経』 T4, 526a11-12.

128 Cf. BHSD s.v. āvedha.

何によって、〔来世への〕 趣きがなくなるのでしょうか。

と詳細に出ているこ〔の偈〕と、その答えである偈〔では〕

眼と耳、同じく鼻、

と詳細に出ているから、〔その答えは〕偈の意義をそなえているとも知るべきである。本文が過多になることを恐れて私は述べない。

厭離の話の結語と 5.3 全体のまとめ (VyY, D shi 133b7-134a2 ; P si 155a8-b3)

それゆえ、以上の類いの偈と、話と、前世での活動 (*pūrvayoga)¹²⁹ などによって、厭離の話を用意すべき¹³⁰ である¹³¹。

【5.3 全体のまとめ】以上の如き、珍奇な、面白い、厭離の話を用意することによって、敬意をもって聴くことに関する〔話〕を語るべきである。

徳慧注 (VyYT, D si 300a6-7 ; P i 192b6-8)

それゆえ、以上の類いの偈と、話と、前世での活動などによって、すなわち上述された偈と、話と、前世での活動などによって〔という Dv. である〕。

などという語によって、自ら善説と結びついた諸の〔話〕によって厭離の話を用意すべきである。

*Sūtrāṃkāra における経典解釈法 (VyY, D shi 134a2-7 ; P si 155b3-156a3)

『莊嚴経論』(*Sūtrāṃkāra)¹³²においても、経典を解釈する方法(*sūtravyākhyānaya)が説かれている。

129 sngon gyi sbyor ba : Cf. BHSD s.v. pūrvayoga. 前世譚というほどの意味であろう。

130 nye bar bsgrub par bya : *upasamhartavya.

131 つまり「厭離の話」は、世親自身が要約するように、6組の偈と、1つの説話(八無暇)と、1つの前世譚(カポータ・マーリニーの因縁譚)から構成されている。

132 出典は馬鳴の『莊嚴経論』(*Sūtrāṃkāra)であろう。当該文献については上野 2015、松田 2020b、2021b、本稿の附論を参照。

- (1) 喜悦¹³³と、(2) 趣意を伴った (**ābhiprāyika*) 諸のことは¹³⁴が多種にわたり語られ〔るべきであり〕、
- (3) 語義 (**padārtha*) と、(4) 次第の連結 (**anusandhiprabandha*) が、適正に¹³⁵、多く¹³⁶語られるべきであり、
- (5) 諸の反論¹³⁷と〔それらに対する〕回答という手段も多く語られ、知られるべきである。
- 以上の諸徳性を伴った諸〔のことは〕がもし説かれるならば、善説なのである¹³⁸。

この偈によっては、佛説が5つの徳性をもつものとして示されたと聞き及ぶ。(1) 目的を有する (**saprayojana*) こと、(2) 趣意が深甚であること、(3) 定義 (**lakṣaṇa*) が深甚であること、(4) 前後の関係 (**pūrvāparasambandha*) があるこ

133 gces pa : Negi s.v., 1. priyaḥ, kāmyaḥ, jyeṣṭhaḥ, pradhānam, dhuryaḥ, sāraḥ. 2. dhuraḥ, bahumānaḥ, dhāma, sāmāthyam. mi gces pa Negi s.v., niṣprayojanam.

原語の特定は難しい。内容的には5相から成る経典解釈法の第一「目的」と同義であるため、初学者を佛教の学修に動機づける目的で「喜びを与えること」を内容する言葉であろう。本稿の注 no. 150 も参照。

134 gsung dag : 諸の「佛説」という意味である。

135 'dra bar : iva, sama に類する副詞として読んだ。

136 mang du : 韻律上の制限から rnam pa が省略されているとみなすべきであろう。次の c 句も同様である。

137 'gal ba dag dang lan gdab thabs : 'gal ba に対応する原語としては virodha が想定される。しかし、後続する lan gdab (**parihāra*) とのつながりからも、また、徳慧注が brgal ba (**codya*) と換言する点からも、「矛盾」というより「論難」の意であろう。そのためここでの 'gal ba を codya の同義異語の翻訳と判断する。なお、**codya* には「論難」との訳語を与えたため、'gal ba には「反論」との訳語を与えておく。

138 チベット訳にして各詩脚が15音節からなる長大な韻文である。以下にチベット訳テキストを提示しておく。

(1) gces¹ pa dang ni(2) dgongs pa can gyi gsung dag rnam pa mang du brjod ||

(3) tshig gi don dang (4) mtshams sbyar bsdebs² pa³ 'dra bar mang du brjod par bya ||

(5) 'gal ba dag dang lan gdab thabs kyang mang du brjod cing shes par bya ||

yon tan 'di dag nams dang ldan pas gal te smra na legs smra yin ||

¹ gces VyY(DP) VyYT(D) : ces VyYT(P)

² bsdebs VyYT(D) : bsdeb VyYT(P) : sdeb VyY(DP)

³ pa VyYT(DP) : dang VyY(DP)

と、(5) 方軌 (*yukti) との関係があることである。

さらに別〔の偈〕も説かれている。

- [1] 対論者に批判されても、愛語をなし、粗暴〔な語を語ること〕のない者、
 [2] 称賛され、あるいは〔自己の主張が〕成立¹³⁹しても、そのところが驕ることのない者、
 [3] 開かれ (*sphuṭa)、[4] 多様で (*citra)、[5] 理に適い (*yukta)¹⁴⁰、
 [6] 〔理解に〕導く (*gamaka¹⁴¹) 〔ところの〕意味を語る者、
 [7] 心に善根を生じさせる者、彼〔こそ〕が説法巧者(善き説法者)である¹⁴²。

この偈によっては、2種の話者(*vaktṛ)の有する、2種の徳性が示されたと聞き及ぶ。2種の話者とは、自己の主張を立てる者(自宗者)¹⁴³と、説法者¹⁴⁴であ

139 grub par gyur: 以下の世親による説明では「勝利」(*jaya)と換言されているため、「対論者との論争に勝利する」という意味をも含む。

140 'brel: sahita の訳であることが多いが、ここでは*yukta が想定される。詳細は Horiuchi 2022 参照。

141 go byed: *gamaka. なお、MSA では女性名詞 deśanā を修飾するため gamikā とあるが、VyY 所引偈では artha(m.) を修飾するため *gamaka(m.) であろう。

142 以下にチベット訳テキストを提示しておく。

gang zhig [1] gzhan gyis brgal na snyan par smra byed rtsub¹ pa ma yin dang ||
 [2] bstod dam grub par gyur kyang gang gi yid ni rgyags par mi byed dang ||
 gang zhig [3] don rgyas pa dang² [4] sna tshogs [5] 'brel dang [6] go byed smra ba dang ||
 gang zhig [7] snying la dge rtsa bskyed³ pa de ni smra byed mkhas pa yin ||

¹ rtsub VyY(D): illegible VyY(P)

² gang zhig don rgyas pa dang VyY(DP): gang zhig gsal dang VyYṬ(DP)

³ bskyed VyY(D): skyed VyY(P)

143 rang gi phyogs 'dzugs pa: 論争を通して自己の主張を打ち立てるもの、というほどの意であろう。cf. AKVy 459.17: vaibhāṣika idānīm svapakṣam sthāpayati.; AKVyṭ, D ngu 104b 5-6, P chu 118a4-5: da ni bye brag tu smra ba ... zhes rang gi phyogs 'jog par byed do ||

144 chos ston pa: 原語としては dharmadeśaka が想定されるか。なお、『釈軌論』第5章では主に chos smra ba po, *dhārmakathika が用いられる。双方の共通点や相違点は、世親の短い説明からは読み取り難い。

る。2種の徳性とは、完全に清浄なることばと、完全に清浄なるところである¹⁴⁵。

その中で、第1（自己の主張を立てる者）の「完全に清浄なることば」は、[1] 対論者に批判されても、愛語を語る点で、または、愛語に非ざる〔粗暴な語〕を語ることがない点で。

「完全に清浄なるところ」は、[2] 称賛や勝利¹⁴⁶を得ても¹⁴⁷、その随煩惱が生じない点で。

第2（説法者）の「完全に清浄なることば」は、[3] 完全に満たされた（*paripūrṇa）、[4] 繰り返しのない（*apunarukta）、[5] 基準（*pramāṇa）と矛盾しない意味をそなえた、[6] 明瞭なる〔ところの〕ことば（*vākya）を語る点で。

「完全に清浄なるところ」は、[7] 自己と他者の相続に善根を生じさせる意図を有する者にとっては心に物欲がない（*nirāmiṣa）点で¹⁴⁸。

徳慧注（VyYṬ, D si 300a7-301a5； P i 192b8-194a2）

（1）喜悅とと詳細に出ている中で、經典の明示（*saṃdarśana）など¹⁴⁹が「喜

145 ngag yongs su dag pa dang | sems yongs su dag pa：いわゆる語清浄と心清浄については『釈軌論』第2章経節（67）でも言及されている。堀内2016：133を参照。

146 rgyal ba：この「勝利」（*jaya）は偈のb句「成立」（grub par gyur, *siddha）の換言である。

147 Cf. MSABh 78.15：stutau siddhau vā.

148 世親の説明をまとめて図示すれば以下のとおり。

2種の話者	2種の徳性	徳性の内容
自宗者	語清浄 心清浄	[1] 対論者に批判されても、愛語をなし、粗暴〔な語を語ること〕はない [2] 称賛され、あるいは〔自己の主張が〕成立しても、そのところが驕ることはない
説法者	語清浄 心清浄	[3] 開かれ、[4] 多様で、[5] 正しく、[6] 理解に導く〔ところの〕意味を語る [7] 心（自己と他者の相続）に善根を生じさせる

149 「など」という語には、教導（*samādāpana）、激励（*samuttejana）、慶喜（*saṃharṣaṇa）が含まれる。『釈軌論』第1章「目的」箇所の出発点となる阿含の定型句「世尊は……（誰々）を、法に関する話でもって、明示し、教導し、激励し、慶喜させた」（bhagavān dhārmayā kathayā saṃdarśayati samādāpayati samuttejayati saṃharṣayati） ↗

悦」であって、すなわち「目的」(*prajojana)が語られるべきである¹⁵⁰。

経典の(2)趣意を伴った諸のことばが多種にわたりとは、趣意¹⁵¹を含んだ(*abhiprāya-vat)ことばが、「趣意を伴った〔諸の〕ことば」である。「多種にわたり」、すなわち複種にわたり(rnam pa du mar)語られるべき、という意味である。

(3) 語義も、語られるべきである。すなわち、およそ語によって語られるべきもの¹⁵²も、言及されるべきであり、語られるべきである。

(4) 次第の連結が、適正にという〔中で〕、「次第」(*anusandhi)とは、前後の2つの語であって、〔それが〕関連づけられるべきある¹⁵³。

その次第の「連結」(*prabandha)が、関連づけられるべきである。

「適正に」とは、正しいあり方(*yuktarūpa)¹⁵⁴で「語られるべき」という意味である¹⁵⁵。

ㄨに基づいている。上野 2017 を参照。

150 「喜悅は目的である」とする徳慧注による限り、gces pa は学び手に佛説を示し教え励まし「喜びを与えること」を指すであろう。

151 当然ながら、徳慧注の前提にはいわゆる「四意趣(4種の趣意)」があるであろう。中でも「人の意欲についての趣意」(*pudgalāśayābhiprāya)は経典解釈の文脈で要請されるものであり、『釈軌論』第1章における「目的」の議論と親和性が高い。ここでの趣意は「人の意欲についての趣意」を指すものと理解したい。

152 徳慧注では「語義」が「およそ語によって語られるべきもの」(brjod pa gang gis brjod par bya ba gang yin pa)と簡潔に言い換えられているが、これは『釈軌論』第1章における世親の説明を援用したものである。VyY, D shi 33a6, P si 37a2-3: tshig gi don ni brjod pa gang gis brjod par bya ba gang yin pa ste |

153 「次第」は『釈軌論』第3章で取り上げられる。世親は「次第」に2種あるとして、「前後の意味の連繋である関連」(don snga phyi 'brel ba'i mtshams sbyar ba)と「前後性の順序の次第」(snga phyi nyid kyi go rims kyi mtshams sbyar ba)を挙げる。徳慧はその双方を含めて説明しているのであろう。

154 rig pa'i ngo bo: チベット訳文のとおりであれば「知の本質」「知を本質とするもの」となるが、文脈に即さない。他方、rigs pa'i ngo bo と訂正することが許されるならば*yuktarūpaなどの原語が想定され、「適切な」などを意味する形容詞、あるいは suitably (MW) を意味する不変化詞として読むことができる。rigs と rig の異同は頻繁に見られ、ここでは rigs の読みがより適切と思われる。

155 上注に記したとおり iva iti yuktarūpaṃ vācyam ity arthaḥ に類する原文がここでは想定されよう。

(5) [諸の] 反論が …… 知られるべきであるという [中で]、「論難」(*codya)¹⁵⁶ は2種ある。語に対する論難と、意味に対する論難という意味である¹⁵⁷。

回答という手段もという [中で]、「回答」(*parihāra) とは、その論難に対する回答である。また、その回答が「手段」(*upāya) なのであり、その手段こそが「多く」、すなわち、たくさん語られるべきである。

以上の諸徳性を伴った諸[のことば]がもし説かれるならば、善説なのである。

とは、(1) 目的を有することという徳性が示された。喜悅 …… が語られ [るべきであり] というこの句によって。

(2) 趣意が深甚であることは、趣意を伴った諸のことばが多種にわたり語られ [るべきであり] というこの句によって。

(3) 定義が深甚であることは、語義が …… 語られるべきというこの句によって。

(4) 前後の関係があることは、次第の連結が、適正にというこの句によって。

(5) 方軌との関係があることという徳性が示されたのは、諸の反論・回答という手段も多く [語られ、] 知られるべきであるというこの句によって¹⁵⁸。

[3] 開かれた¹⁵⁹、と詳細に出ているのは、[3] 開かれた意味を語る者、ない

156 ここでの「論難」は「反論」(gal ba) の換言である。

157 この徳慧注の注釈も、『釈軌論』第3章「論難・回答」における世親の説明を援用したものである。世親は「論難」に2種あるとして、「語に対する論難」(sgra la brgal ba, *śabdacodya) と「意味に対する論難」(don la brgal ba, *arthacodya) を挙げる。VyY, D shi 85b4-5, P si 100b3 : brgal ba ni nmam pa gnyis te | sgra la brgal ba dang | don la brgal ba'o ||

158 「方軌」(*yukti) と「論難・回答」の関係はわかりにくい。いわゆる「四種道理」のうち、「正しい判断基準」(pramāṇa) に基づく「証成道理」(upapattisāadhanayukti) が近い。

159 VyYT には gang zhiḡ gsal dang zhes bya ba とあり、それに対応する VyY には gang zhiḡ don rgyas pa dang とあるため、一見すると齟齬があるように見える。しかし、原語としては sphuṭa が想定される箇所であるから、そのチベット訳語として gsal も rgyas pa も共にあり得るし (Negi s.v.)、特に VyYT にある gsal からは明らかに sphuṭa が予想される。また、VyY にある don/*artha は、sphuṭa, citra, yukta, gamaka という4つの形容詞が修飾する名詞であるため、チベット訳の都合上、形容詞の前に置かれているだけであり、他方、冒頭句のみを引用する VyYT ではその必要がないため don/*artha へ

し、[6] 理解に導く意味を語る者に至るまで¹⁶⁰。

自己の主張を立てる者と、説法者である。その中で、「自己の主張を立てる者」とは、敵論者¹⁶¹を論破して、自己の主張、すなわち佛説を立てる者であると理解すべきである¹⁶²。

「説法者」とは、法のみを¹⁶³顛倒なく説き、正しく区分して知る者のことである。

その中で、第1の「完全に清浄なることば」は、自己の主張を立てる者が、であって、[1] 対論者に批判されても¹⁶⁴、愛語を語る点で、または、愛語に非ざる〔粗暴な語〕を語ることがない点で。〔すなわち、〕敵論者に対し、愛語を語り、愛語に非ざる〔粗暴な語〕を語ることがないから、「完全に清浄なることば」であると示された。いかなる〔句〕によってか。第1句によって。

完全に清浄なるところは、他〔の句〕によって〔示された〕。それ（他の句）の中で、[2] 称賛や勝利を得てもとは、称賛を得て、勝利を得ても、その随煩惱が生じない点で。この中で、称賛を得て、勝利を得ても、驕り（*mada）¹⁶⁵というその随煩惱が生じないことが、「その随煩惱が生じない」である。その（=驕

ゝの言及が不要なのである。すなわち *yaś ca sphuṭacitrayuktagamakam artham というように『釈軌論』の原文を推定すると（韻律は考慮していない）、VyY では gang zhiḡ don rgyas ... と翻訳された。他方、VyYT ではこの一文の冒頭のみが引用されるため、*yo ca sphuṭa-iti というように原文を推定すると、それが gang zhiḡ gsal dang zhes bya ba ... と翻訳された。こうした推測に基づけば、世親本論と徳慧注のテキストを修正する必要がないこと、またチベット訳語が rgyas pa であってもその意味は「廣大」ではなく「開かれた」（*sphuṭa）であることがわかる。

160 don, *artha が [3] から [6] に至る各語に係るという趣旨の注釈である。

161 phas kyi rgol ba : cf. BHSD s.v. paravādin.

162 興味深い説明であるため、ここに徳慧注のテキストを提示しておく。de la rang gi phyogs 'dzugs pa ni phas kyi rgol ba tshar bcad nas rang gi phyogs sangs rgyas kyi gsung 'dzugs pa byed pa yin par rig par bya'o ||

163 「法のみを（chos kho na）顛倒なく説く」というこの語には、「自己の主張を立てる者」の説明の中にある「敵論者の論破」を行わないことが含意されている。つまり、この点に両者を隔てる大きな相違があると思われる。

164 brgal du zin kyang VyYT (DP) : brgal ba na VyY (DP). 第2偈 a 句の引用もしくは換言。以下にはほぼ同内容の一文が徳慧の地の文として繰り返されているため、換言ではなく引用とみなすべきか。

165 rgyas pa : *mada. MSA XII.6 における [2] mada[-vyapeta] と一致する。

りという)随煩惱が生じないから、「その随煩惱が生じない」であり¹⁶⁶、すなわち「完全に清浄なるところ」であると示された。第2句によって。

第2の「完全に清浄なることば」は、[3] 完全に満たされた、[4] 繰り返しのない、[5] 基準と矛盾しない意味をそなえた、[6] 明瞭なる〔ところの〕ことばを語る点で、「完全に清浄なることば」であると示された。第3句によって。

どのようにして〔示されたの〕か。[3] 完全に満たされた〔ことば〕を語る点で、「完全に清浄なることば」であると示されたのは、[3] 開かれたというこの句によって。

[4] 繰り返しのない〔ことば〕を語る点で、繰り返しのない〔ことば〕を語るのである。[4] 多様なというこの句によって¹⁶⁷。

[5] 基準と矛盾しない意味をそなえた〔ことば〕によって〔とは〕、基準と矛盾しない意味をそなえた〔ことば〕によって〔という Bv.〕である。[5] 理に合ったというこの句によって¹⁶⁸。

[6] 明瞭なることばの意味を語る点で、明瞭なることばを語る点である。[6] 理解に導くというこの句によって。

かの者(説法者)の「完全に清浄なるところ」は、[7] 自己と他者の相続に善根を生じさせる意図を有する者にとっては心に物欲がない点で、「〔完全に清浄なるところ〕であると」示された。第4句によって。

『釈軌論』の結偈 (VyY, D shi 134a8-b1 ; P si 156a3-4)

あたかも、火の発端が薪である〔ように〕、
 あたかも、水の路が整備されるように、
 そのように、慧をそなえる者たちに対して、

166 世親本論の原文は*tad-upakleśa-anutpatteh あたりが想定されよう。徳慧は一文目では tad を mada (驕り)と注釈する。世親本論にこの語は見当たらないものの、「〔立論による〕称赞と勝利を得る」という文脈から、徳慧の理解は妥当であろう。二文目は複合語を分解したものであろう。

167 Cf. MSABh 78.16 : **citrā** apunaruktatvāt.

168 Cf. MSABh 78.16-17 : **yuktā** pramāṇāvīruddhatvāt.

以上、經典の釈の一端 (*leśa¹⁶⁹) を説いた¹⁷⁰。

徳慧注 (VyYṭ, D si 301a5-6 ; P i 194a2-4)

以上、經典の釈の一端をとほ、經典の釈 (*sūtra-ākhyā)、すなわち解釈 (*vyākhyā) が「經典の釈」である。

經典の釈の一端、すなわち一面 (phyogs gcig) ないし一部 (cha shas) が「經典の釈の一端」である。

以上 (*idam) という〔語〕は、〔これまでに〕上述されたことを示すものである。

『釈軌論』の奥付 (VyY, D shi 134b1-2 ; P si 156a4-5)

『釈軌論』より第5章。

世親師による御作『釈軌論』完了。

インドの和上 Viśuddhasimha¹⁷¹, Śākyasimha¹⁷² と、ツァンの僧・大翻訳官¹⁷³ Deven-

169 shan: 山口 1959: 156, n. 2 は「ふちを作ること」の意味で捉えている。これは b 句に「水路」(chu'i lam) とあることに起因すると思われる。しかし、堀内 2009: xvii, n. 6 にて示したとおり、原語は *leśa (一端) と推測される。自身が『釈軌論』にて説いたことは經典解釈のごく一端に過ぎないと、おそらくは謙遜を込めて述べたのであろう。確かに、『俱舍論』『破我品』の最後にも類似の表現が見受けられる。

AKBh(L) 168.10: diñmātram evedam upadiṣṭam sumedhasām |

AKBht(L) 169.10, 13: de ltar 'di ni phyogs tsam shig || ... shin tu mkhas pa rmas la bstan ||

「以上、これは〔教学の〕単なる一端(方隅)だけであり、〔それが〕賢者たちに対して示されたのだ」(村上 1993: 132 より訳文を抜粋)

170 以下にチベット訳テキストを提示しておく。

ji ltar me'i sgo bud shing yin ||

ji ltar chu'i lam gtod pa ltar ||

de bzhin blo dang ldan rmas la ||

mdo sde bshad pa'i shan 'di bstan ||

171 Viśuddhasimha (nam dag seng ge) は、『ブトン佛教史』第3章の入蔵僧リストで第7番目に名前が挙がる人物である。BU: bi shuddha si ha nam dag seng ge.

172 Śākyasimha は、『ブトン佛教史』第3章の入蔵僧リストには記載がないものの、『大乘莊嚴經論』(本偈・世親釈・無性釈とも)の翻訳者として記録されている人物である。

173 室寺 2003: 154 が指摘するように、姉妹文献である『釈軌論の百経節』(Vyākhyāyuktisūtrakhaṇḍasāta) および『釈軌論』の奥付に確認される zhu chen gyi lo ts'a ba (大校訂翻訳官)との肩書きは、『釈軌論注』の奥付にない。この点から、『釈軌論注』は Devedraraksita が大校訂翻訳官に任命される以前の翻訳であり(したがって『百経節』およ

drarakṣita¹⁷⁴が翻訳し、校訂し、確定した。

『釈軌論注』の結偈および奥付 (VyYṬ, D si 301a6-7 ; P i 194a4-7)

〔世親〕師に目の当たりに聴聞して¹⁷⁵、信をそなえ慧の劣る者たち、
彼らを裨益しようとして、『釈軌論』の注釈を解説した¹⁷⁶。

徳慧師による御作『釈軌論注』完了。

インドの和上 Viśuddhasiṃha, Śākyasiṃha と、僧・翻訳官 Devendrarakṣita が翻訳し、校訂し、確定した。ここ（『釈軌論注』）には śloka が^s4100ある¹⁷⁷。

(完)

ゝび『釈軌論』は任命以後の翻訳であり）、『釈軌論』関連三文献の翻訳順序は『釈軌論注』→『百経節』／『釈軌論』であったとの推測が可能である。

174 Devendrarakṣita は、『釈軌論』関連の三文献（世親本論、徳慧注、『百経節』）の他、世親論書では『成業論』（*Karmasiddhi*）の翻訳者として記録されている人物である。

175 slob dpon mngon sum mnyan byas nas ||: 山口 1959 : 154 は当該詩節を根拠として、徳慧の在世年代が世親のそれ（5世紀）と重複する可能性、すなわち徳慧が世親に直接見えていた可能性を推測する。一方、Muroji 1997 は、『縁起経論』及び『縁起経論注』における「死」（*marāṇa*）の定型表現をメルクマールとして、徳慧の依用した『縁起経論』が世親の依用したそれとは異なるヴァージョンであることを証明し、むしろ世親と徳慧の間にある断絶を浮き彫りにする。徳慧の位置づけについては結論を先送りする。

176 以下にチベット訳テキストを提示しておく。

slob dpon mngon sum mnyan byas nas ||
dad dang ldan pa blo zhan pa ||
de rnams la ni phan 'dod pas ||
rnam bshad rigs pa'i 'grel bshad yin ||

177 'di la tshigs su bead pa ni bzhi stong cig brgya yod ||: 『ヘンカル目録』（*lHan kar ma*）では、『釈軌論』は 1800 śloka (stong brgyad brgya) ・ 10 卷 (bam po bcu)、『釈軌論注』は 4500 śloka (bzhi stong lnga brgya) ・ 15 卷 (bam po beo lnga) というように、『釈軌論注』の śloka の数が『釈軌論注』チベット訳文のそれよりも 400 śloka 多く記載されている。*lHan kar ma*, nos. 649-650 : rnam par bshad pa'i rigs pa | ślo ka stong brgyad brgya ste bam po bcu | rnam par bshad pa'i rigs pa'i 'grel pa slob dpon yon tan blo gros kyis mdzad pa | ślo ka bzhi stong lnga brgya ste bam po bco lnga | 「『釈軌論』、1800 śloka, 10 卷。徳慧師による御作『釈軌論注』、4500 śloka, 15 卷。」 (Lalou 1953 : 335.1-3, Herrmann-Pfandt 2008 : 361-362)

附論：馬鳴の『莊嚴經論』と弥勒・無著の『大乘莊嚴經論』

『釈軌論』全体のいわば締め括りとして引用される*Sūtrālamkāra (SA) の偈とそれに対する世親の注釈は、『大乘莊嚴經論』第12章第6偈とそれに対する世親の注釈に類似しており、後者をもとに、前者の原語もある程度回収し得る。その第6偈は、説法の完備 (deśanāśampatti, 説示円満) に関する2つの偈のうち、後者である (長尾 2007b : 169)。そのため、大きな文脈的にも、経典解釈法について説かれたと『釈軌論』が述べる SA に近い関係にある。『釈軌論』所引偈と対応する語句には [1] 以下の通番を、対応しない語句については [X] 以下の記号を付す。太字は『大乘莊嚴經論』本頌およびその語句であることを示す。梵文とチベット訳を挙げる。

[1] madhurā [2] madavyapetā [X] na ca khinnā deśanāgrasatvānām |

[3] sphuṭā [4] citrā [5] yukta [6] gamikā [7] nirāmiṣā [Y] sarvagā caiva ||XII.6||

asmin dviṭīye śloke [1] madhurā pareṅkṣiptasyāparuṣavacanāt.

[2] madavyapetā stutau siddhau vā madānanugamanāt.

[X] akhinnā akilāsikatvāt.

[3] sphuṭā nirācāryamuṣṭitvāt. kṛtsnadeśanataḥ.

[4] citrā apunaruktatvāt.

[5] yukta pramāṇāvīruddhatvāt.

[6] gamikā pratītapadavyaṅjanatvāt.

[7] nirāmiṣā prasannādhikārānarthikatvāt.

[Y] sarvatragā yānatrayagatatvāt. (MSABh 78.12-18 ad MSA XII.6)

▽ 『パンタン目録』(‘Phang thang ma) には śloka 数の記載はなく、巻数のみが記載されている。‘Phang thang ma, no. 576 : rNam par bshad pa’i rigs pa | 6 bp. | no. 577 : rNam par bshad pa’i rigs pa’i bshad pa | 15 bp. | (川越 2005 : 28)

なお『釈軌論』(1800 śloka) の巻数について、『パンタン目録』は6巻と記載し、『ヘンカル目録』は10巻と記載する。300 śloka を1巻と数える標準的な算出によれば6巻となり、チベット訳『釈軌論』の本文中には巻1から巻10までの記載があるため、その本文に基づけば10巻となる。

sems dpa' mchog gi ston pa ni ||

[1] 'jam zhing [2] rgyags bral [X] mi skyo ba¹ ||

[3] gsal zhing [4] sna tshogs [5] rigs pa dang ||

[6] 'go² zhing [7] zang zing med [Y] kun 'gro ||

(MSAt, D phi 16b7, P phi 18b7-8)

tshigs su bca'd pa gnyis pa 'di la [1] 'jam pa ni gzhan gyis brgal ba la tshig rtsub³ mo mi 'byin pa'i phyir ro ||

[2] rgyags pa dang bral ba ni bstod dam grub na rgyags par mi 'gyur ba'i phyir ro||

[X] mi skyo ba ni dub pa med pa'i phyir ro ||

[3] gsal ba ni zad par ston pas slob dpon gyi⁴ dpe mkhyud med pa'i phyir ro ||

[4] sna tshogs ni mi zlos pa'i phyir ro ||

[5] rigs pa ni tshad ma dang mi 'gal ba'i phyir ro ||

[6] 'go ba ni tshig dang yi ge grags pa'i phyir ro ||

[7] zang zing med pa ni dad pa'i lhag par bya ba don du mi gnyer ba'i phyir ro ||

[Y] kun tu 'gro ba ni theg pa gsum car la 'gro ba'i phyir ro ||

(MSABht, D phi 181b6-182a2, P phi 196b2-5)

¹ dang MSAt(DP) MSABht(P) : ba MSABht(D)

² 'go MSABht(DP) MSAt(D) : go MSAt(P)

³ rtsub MSABht(D) : rtsu MSABht(P)

⁴ gyi MSABht(D) : gyis MSABht(P)

[X] と [Y] の 2 語のみ対応語句が見当たらないが、[1] から [6] は順序・内容とも『釈軌論』所引偈と一致する。[7] は『釈軌論』所引偈に対する世親による注釈の中に*nirāmiṣa とあることから対応を見い出すことができる。また、4 と 5 について、VyY の説明は MSABh と完全に一致する。

さて、この類似性の発見に基づき、『釈軌論』に引用される SA について考察を加えたい。まず、双方が同一出典に基づく別バージョンであるという可能性は排除してよい。語彙の相違が大きいからである。他方、内容の類似性から、双方が全く無関係であると断定するのも難しい。定型句や法数の場合には類似もしくは一致があっても当然であるものの、ここで挙げられる諸項目がこの順序で挙げら

れる例は、管見の及ぶ限り他に見当たらない。以上の諸点を総合すると、この偈に関しては、MSA の偈は馬鳴の SA、すなわち『莊嚴經論』を踏まえて作られたとの推察が成り立つと思われる。

以下、各術語の対応関係を一覧にして示す。

no.	SA, VyY	MSA(Bh)
[1]	gzhan gyis brgal na snyan par smra byed rtsub pa ma yin (VyY)	gzhan gyis brgal ba la tshig rtsub mo mi 'byin pa'i phyir (MSABh)
[2]	yid ni rgyags par mi byed (VyY)	rgyags par mi 'gyur ba'i phyir (MSABh)
[2]	bsngags pa dang rgyal ba thob kyang (VyY)	bstod dam grub na (MSABh)
[3]	rgyas pa (SA)	gsal ba (MSA)
[4]	sna tshogs (SA)	sna tshogs (MSA)
[4]	mi zlos pa (VyY)	mi zlos pa'i phyir (MSABh)
[5]	'brel (SA)	rigs pa (MSA)
[5]	tshad ma dang mi 'gal ba (VyY)	tshad ma dang mi 'gal ba'i phyir (MSABh)
[6]	go byed (SA)	'go [ba] (MSA)
[7]	sems zang zing med pa nyid (VyY)	zang zing med [pa] (MSA)

SA	VyY	MSA
対論者に批判されても愛語を語り、粗暴〔な語を語ること〕のない者	対論者に批判されても愛語を語り、愛語に非ざる〔粗暴な語〕を語ることがない	柔和である
称賛され〔自己の主張が〕成立しても、そのところが驕ることのない者	称賛や勝利を得ても随煩惱が生じない	酔い（驕り）を離れる
開かれた意味を語る者	完全に満たされたことばを語る	開かれた
多様な意味を語る者	繰り返しのないことばを語る	多様である
理に適う（正しい）意味を語る者	基準と矛盾しない意味をそなえたことばを語る	理に適う
理解に導く意味を語る者	明瞭なることばを語る	理解に導く
心に善根を生じさせる者	自己と他者の相続に善根を生じさせる意図を有する者にとっては心に物欲がない	物欲がない

略号および参考文献

- Apte Vaman Shivaram Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Kyoto : Rinsen Book Co., 1978.
- BHSD F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. 2 : Dictionary. Kyoto : Rinsen Book Co., 1985.
- MW Sir M. Monier-Williams, *A Sanskrit English Dictionary*. Tokyo : Meicho Fukyu Kyokai K. K., 1982.
- D デルゲ版チベット大蔵経.
- Negi J. E. Negi, *Bod skad dang Legs sbyar gyi tshig mdzod chen mo (Tibetan-Sanskrit Dictionary)*. Sarnath/Varanasi : Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1993-2005.
- P 北京版チベット大蔵経.
- PED T.W. Rhys Davids and William Stede, *Pali English Dictionary*. Chipstead, Surrey : Pali Text Society, 1925.
- SWTF H. Bechert et al., *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden und der kanonischen Literatur der Sarvāstivāda-Schule*. Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1973-2018.

T 大正新脩大藏經.

一次文献

- AD *Abhidharmadīpa* (Īśvara) : P.S. Jaini (Ed.), Patna 1959.
- AK *Abhidharmakośa* (Vasubandhu) : P. Pradhan (Ed.), Patna 1967.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu) : P. Pradhan (Ed.), Patna 1967.
- AKBh(E) Chapter I, Dhātunirdeśa of the AKBh : Y. Ejima (Ed.), Tokyo 1989.
- AKBh(L) Chapter IX, Ātmavādapraṭiṣedha of the AKBh : Jong Choel Lee (Ed.), Tokyo 2005.
- AKBht(L) The Tibetan Translation of the Ātmavādapraṭiṣedha of the AKBh. Ibid.
- AKUp *Abhidharmakośaṭīkopāyikā* (Śamathadeva) : D 4094, P 5595.
- AKVy *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra) : U. Wogihara (Ed.), Tokyo 1932-1936.
- AKVyt The Tibetan Translation of the AKVy. D 4092, P 5593.
- ArthavSū *Arthavinīścayasūtra*. N. H. Samtani (Ed.), Patna 1971.
- BC *Buddhacarita* (Aśvaghoṣa) : E. H. Johnston (Ed.), Lahore 1936.
- BCt The Tibetan Translation of the BC. D 4156, P 5656.
- BU *Bu ston chos 'byung* (Bu ston rin chen grub) : Rdo rje rgyal po (Ed.), Beijing 1988.
- DbSū *Daśabalasūtra* II. Ernst Waldschmidt (Ed.), Leipzig 1932.
- lHan-kar ma dkar chag lHan (lDan) kar ma. See Lalou 1953, Herrmann-Pfandt 2008.
- MSA *Mahāyānasūtrālamkāra* (Maitreya/Asaṅga) : Sylvain Lévi (Ed.), Paris 1907.
- MSAt The Tibetan Translation of the MSA. D 4020, P 5521.
- MSABh *Mahāyānasūtrālamkārabhāṣya* (Vasubandhu) : Sylvain Lévi (Ed.), Paris 1907.
- MSABht The Tibetan Translation of the MSABh. D 4026, P 5527.
- Mvy(IF) *Mahāvīyūtpatti*. Ishihama Yumiko and Fukuda Yōichi (Eds.), Tokyo 1989.
- Mvy(S) Ibid., Sakaki Ryōzaburo (Ed.), Kyoto 1916-1925.
- Pravr-v IV *Pravrajyāvastu*. Claus Vogel and Klaus Wille (Eds.), Göttingen 2002.
- Śag *Śarīrārthagāthā*. F. Enomoto (Ed.), See Enomoto 1989.
- ŚrBh I *Śrāvakahūmi*, the First chapter. Śrāvakahūmi Study Group (Ed.),

- Tokyo 1998.
- ŚrBh II *Śrāvakahūmi*, the Second chapter. Śrāvakahūmi Study Group (Ed.), Tokyo 2007.
- ŚrBh III *Śrāvakahūmi*, the Third chapter. Śrāvakahūmi Study Group (Ed.), Tokyo 2018.
- ŚrBh(Shukla) *Śrāvakahūmi*, the Fourth chapter. K. Shukla (Ed.), Patna 1973.
- SBhV *Sanḅhabhedavastu*. Raniero Gnoli (Ed.), Roma 1977, 1978.
- Uv *Udānavarga*. Franz Bernhard (Ed.), Göttingen 1965.
- VyY *Vyākhyāyukti* (Vasubandhu) : D 4061, P 5562.
- VyYT *Vyākhyāyuktiṭkā* (Guṇamati) : D 4069, P 5570.
- 『中阿』 『中阿含経』 T1, No.26.
- 『雑阿』 『雑阿含経』 T2, No.99.
- バーリ佛典の略号は *A Critical Pāli Dictionary* の Epilegomena に従い、テキストは The Pali Text Society 版を用いた。

二次文献

赤沼 智善

1929 『漢巴四部四阿含互照録』, 名古屋: 破塵閣書房。

上野 牧生

2010 「『釈軌論』における阿含經典の語義解釈法 (1)」『印度哲学仏教学』25: 71-84.

2015 「アシュヴァゴーシャの失われた莊嚴經論」『インド論理学研究』VIII(松田和信教授還暦記念号): 203-234.

2017 「ヴェスバンドゥの經典解釈法 (1) – 經典の目的 (*sūtrāntaprayojana*) –」『仏教学セミナー』105: 45-104.

2020 「第29三啓経(八難経)の梵文テキストと和訳」『仏教学セミナー』111: 21-47.

上野 牧生・堀内 俊郎

2018a 「世親作『釈軌論』第5章翻訳研究 (1)」『国際哲学研究』7: 117-138.

2018b 「同上 (2)」『仏教学セミナー』107: 31-70.

2018c 「同上 (3)」『インド学チベット学研究』22: 153-178.

- 2019 「同上(4)」『南アジア古典学』14: 147-176.
上野 牧生・松田 和信
- 2021 「アシュヴァゴーシャからヴァスバンドゥへー釈軌論と俱舎論に見る法
滅観と馬鳴の詩作品ー」『仏教学セミナー』113: 51-72.
上村 勝彦
- 1998 『夢幻の愛 インド詩集』, 東京: 春秋社.
大内 文雄
- 1973 「安楽集に引用された所謂疑偽経典についてー特に惟無三昧経・浄度菩
薩経を中心としてー」『大谷学報』53(2): 56-68.
川越 英真
- 2005 『dKar chag 'Phang thang ma』, 東北インド・チベット研究叢書. 仙台:
東北インド・チベット研究会.
- 櫻部 建
- 1969 『俱舎論の研究 界・根品』, 京都: 法蔵館.
- 櫻部 建・小谷 信千代
- 1999 『俱舎論の原典解明 賢聖品』, 京都: 法蔵館.
- 櫻部 建・小谷 信千代・本庄 良文
- 2004 『俱舎論の原典研究 智品・定品』, 東京: 大蔵出版.
声聞地研究会
- 1998 『瑜伽論声聞地 第一瑜伽処ーサンスクリット語テキストと和訳』, 東
京: 山喜房佛書林.
- 2007 『瑜伽論声聞地 第二瑜伽処ーサンスクリット語テキストと和訳』, 東
京: 山喜房佛書林.
- 2018 『瑜伽論声聞地 第三瑜伽処ーサンスクリット語テキストと和訳』, 東
京: 山喜房佛書林.
- 長尾 雅人
- 2007a 『『大乘莊嚴經論』和訳と註解 長尾雅人研究ノート 第1巻』, 京都:
長尾文庫.
- 2007b 『同上 第2巻』, 京都: 長尾文庫.
- 2009 『同上 第3巻』, 京都: 長尾文庫.
- 舟橋 一哉

- 1987 『俱舎論の原典解明 業品』, 京都: 法蔵館.
- 堀内 俊郎 (Horiuchi Toshio)
- 2009 『世親の大乗仏説論-『釈軌論』第四章を中心に-』, 東京: 山喜房佛書林.
- 2016 『世親の阿含経解釈-『釈軌論』第2章訳註-』, 東京: 山喜房佛書林.
- 2022 “Aśvaghōṣa, Aśaṅga, and Vasubandhu: From the *Vyākhyāyukti* Chapter 5.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 70-3: Forthcoming.
- 本庄 良文
- 2001 『『釈軌論』第一章(上)-世親の経典解釈法-』『香川孝雄博士古稀記念論集』, 京都: 永田文昌堂, 107-120.
- 2014a 『俱舎論註ウパーイカーの研究 訳註篇』(上巻), 東京: 大蔵出版.
- 2014b 『同上』(下巻), 東京: 大蔵出版.
- 松田 和信
- 2019 「三啓集 (*Tridaṇḍamālā*) における勝義空経とブツダチャリタ」『印度学仏教学研究』68-1: 1-11.
- 2020a 「ブツダチャリタ第15章〈初転法輪〉-梵文テキストと和訳-」『佛教大学仏教学会紀要』25: 27-44.
- 2020b 「大智度論におけるアシュヴァゴーシャー如来十号論に埋め込まれた莊嚴経論-」『印度学仏教学研究』69-1: (53)-(61).
- 2021a 「不浄観を説く中阿含139経-三啓集から回収された梵文テキストと和訳-」『佛教大学仏教学会紀要』26: 63-81.
- 2021b 「大智度論におけるアシュヴァゴーシャー戒論に埋め込まれた莊嚴経論-」『印度学仏教学研究』70-1: (61)-(69).
- 三友 健容
- 2007 『アビダルマディーバの研究』, 京都: 平楽寺書店.
- 村上 真完
- 1993 「人格主体論(靈魂論)-俱舎論破我品訳註(二)-」『渡邊文磨博士追悼論集 原始仏教と大乗仏教』下巻, 京都: 永田文昌堂, 99-140.
- 室寺 義仁 (Muroji Yoshihito-Gijin)
- 1985 『成業論 チベット語訳校訂本』, 京都: (私家版).
- 1997 “Guṇamati’s Version of the *Praṭītyasamutpādādivibhanganirdeśa*,” *Tibetan*

Studies vol.II. Wien : Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 647-656.

- 2003 「ヴェアスバンドゥに帰せられるチベット語翻訳文献群について」『論集：原典』平成10年度～14年度 文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究(A) 118「古典学の再構築」研究成果報告集Ⅱ, A 01「原典」班研究報告, 神戸, 144-157.

山口 益

1951 『世親の成業論』, 京都：法藏館.

- 1959 「世親の釈軌論について－かりそめな解題というほどのもの－」『日本佛教学会年報』25: 35-68. (『山口益仏教学文集』下, 東京：春秋社, 1973, 153-188に再録。本稿において山口1959を指示する際は、頁数のみ山口1973に依拠した。)

山口 益・舟橋 一哉

1955 『俱舎論の原典解明 世間品』, 京都：法藏館.

李 鍾徹

- 2001 『世親思想の研究－『釈軌論』を中心として』, 東京：山喜房佛書林.

Chung, Jin-il

- 2008 *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Saṃyuk-tāgama*. Tokyo : The Sankibo Press.

Chung, Jin-il and Fukita, Takamichi

- 2011 *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Madhyamāgama*. Tokyo : The Sankibo Press.

Enomoto, Fumio

- 1989 “Śarīrārthagāthā : A Collection of Canonical Verses in the *Yogācārabhūmi*. Prat 1 : Text,” *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon 1*. Göttingen : Vandenhoeck und Ruprecht, 17-35.

Herrmann-Pfandt, Adelheid

- 2008 *Die lHan kar ma : ein früher Katalog der ins Tibetische übersetzten buddhistischen Texte*. Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Kramer, Jowita

- 2015 “Innovation and the Role of Intertextuality in the *Pañcaskandhaka* and Related Yogācāra Works,” *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, 36/37 : 281-352.
- Lalou, Marcelle
- 1953 “Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-sroñ-lde-bean. Contribution à la bibliographie du Kanjur et du Tanjur,” *Journal Asiatique* 241 : 313-353.
- Lee, Jong Choel
- 2001 *The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu, critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking editions.* Tokyo : Sankibo Press.
- Obermiller, E.
- 1931 *History of Buddhism (Chos-ḥbyung) by Bu-ston, Part 1.* Heidelberg : Institut für Buddhismus-Kunde.
- Schlingloff, Dieter
- 1955 *Buddhistische Stotras : aus ostturkistanischen Sanskrittexten.* Berlin : Akademie-Verlag.
- Skilling, Peter
- 2000 “Vasubandhu and the *Vyākhyāyukti* Literature,” *Journal of International Association of Buddhist Studies* 23-2 : 297-350.

【謝辞】

本庄良文先生の御教示に衷心より感謝の意を表する。

編集注：当該原稿は研究所紀要第38号に掲載予定であった原稿である。

編集上の諸事情により掲載ができなかったため、本号に掲載するものである。